

84
22

世界歴史譚
第貳編

孔子



008218-000-1

84-22

孔子

吉国 藤吉/著

M32

AAC-0092



序言

予幼き頃四書五經を父母より教へられて朝夕人倫五常の道を説き聞かされ、かゝる大切の教を此世にひろげ給ひしは孔夫子さなん云へる大聖人なることを夙に耳にしたり、爾來今日に至るまで星霜を経ること十有幾年、孔夫子の事蹟はさだめて面白く且つ有益なる節多かるべしとはかねて思ひ居たれども、開け行く御世の物あたらしき學問にせかれて露のひまだもなかりければ聖人の一生を伺はんことも未だになし得ざりき、さるに此程博文館にて少年讀者に有益なる世界歴史譚を發行するにつき孔夫子の話しをこの急なる依頼ありたればかねての素志を遂げ試みんをりもがなとていそぎにいそぎて下の一編はつゞれるなりけり、もごよりたゞのあらましに過ぎざることな

れど少年諸子一讀して一片の心に得る所あらば予の願ひ足れり
とせん、

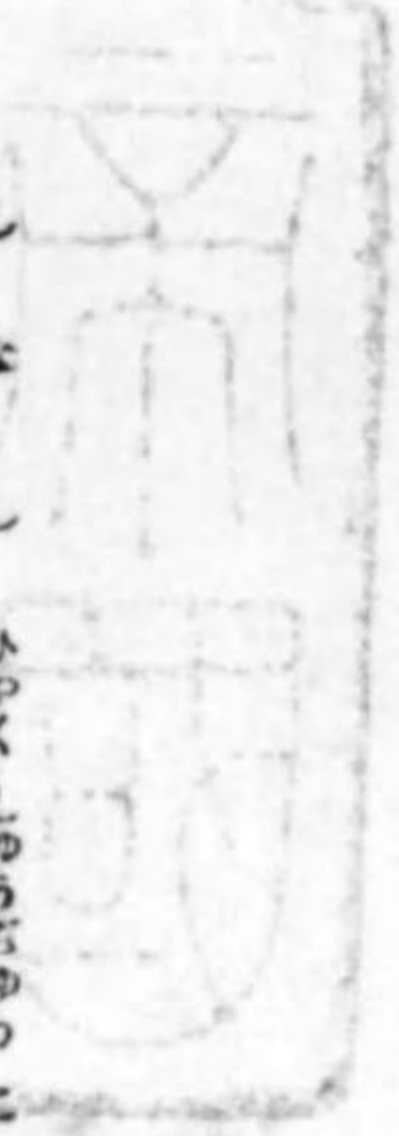
明治三十一年十二月上野の森を眺めて

吉國藤吉

世界歴史譚
第二編
孔子

文學士 吉國藤吉著

横山大觀畫



支那四百州中古今獨歩の大偉人とも稱すべく其徳望の高し
て然も其恩澤の洽く行き亘り萬世までも渝らざる恰も天地の
不朽なるに均しきは恐く孔子を措て他に其人なかるべし素
より支那は土地廣くして幾千年の永き月日を経たる大國なれ
ば或は武事に或は文事に或は政治に各拔群の技倆を顯はし一
世の功名を博せし者の輩出せしは數知れず漢の高祖楚の項羽
は勇を以て其名轟き韓退之歐陽修李白杜甫の如きに至ては共

に文を以て後世を風靡し、さては唐の杜如晦、房玄齡、とし云へば
 共に廟堂の政に妙を得たるが如く、一々之を數へ舉げなば、積て
 卷を成すに至らん、是等の人士は、皆不世出の英才にして、後人の
 欽仰する所なるには、相違なれども、其國家に及ぼせる影響に
 至ては、概ね一代に止まる者多し、偶々末代に及ぶあるも、其範圍
 頗る狭きに似たり、然れども、獨り孔夫子に至ては、時こそ三千の
 星霜を経たれ、其民心を感化する力の依然として、古も今も變ら
 ざるは、洵に類ひ稀なる事とぞ云ふべけれ、四百餘州をあるしめ
 す、支那の王朝は、空吹き荒す嵐に誘はれて、幾度もなく世を代へ
 盛衰榮枯常ならぬが例なるに、獨り孔夫子の威名徳望は何れの
 御世にも變りなく、過ぎ往く月日と、同じく滾々として、盡きざる
 こと、谷川の流に於けるが如きは、洵に泥中の玉、求めんと欲して

も得可からざるべし、かゝる例を異國に索めんか、泰西の基督印
 度の釋迦、亞刺比亞のモハメット等は、其萬世を風靡するの點に
 於ては、孔夫子と相類せる者なり、さればにや、世に孔子、釋迦、基督
 の三人を稱して、世界の三大偉人と云ふも、理りなるぞかし、教理
 の深遠蘊奧に至りては、孔夫子或は釋迦、基督に一籌を輸す、雖
 も孔夫子の説き給へる人倫の道は、豈に獨り東洋人種のみ之を
 遵守すべきものならんや、自由平等を主張せる彼碧眼の輩と云
 へども、陰に陽に人たるの道を奉ずるを見れば、孔夫子の徳澤の
 及ぶ所亦偉大なりと謂ふべし、少年諸子が、拳々服膺して、朝夕も
 忘れざる忠孝仁義の大道は、實に孔夫子の説き始め給ひしもの
 ぞかし、かゝる大偉人が、何れの御世に出ても、如何なる生活をな
 し給ひしか、亦其説き給へる教は、如何なるものなりしか、是れ予

が逐次少年諸子に語らんごする所なり、孔子は今を去る二千有餘年の昔我朝の第二代綏靖天皇の晩年に魯の國の昌平郷と云へる片田舎に生る魯は今の山東省の中なり支那三代周の御世にして靈王の廿一年魯の襄公の二十二年なりごかや當時周の世の有様を察するに今日ごは事變り領地の廣さは北黃河の邊より南楊子江の邊に到り今日の直隸山東、山西、安徽、江蘇、河南、湖北等の諸省を含み其面積は現時の支那本部の六分の一に過ぎずして他は悉く蒙昧なる蠻族の巢窟たり、國の制度は所謂封建の制にして上に全國を統へ給ふ王あり、れども下に幾多の諸侯ありて各地に割據し年貢を王に納め事ある時に兵役を負ふの義務を有せし者なるがかゝる制度は其國の王たる者賢明にさへあらば國家の隆盛を來すは必然なれ

ご君暗愚に在して下を抑ゆるの明なくんば諸侯は上に對して肆に舉動ふに至るは自然の勢なり、周は恰も之に類し王室漸く衰ふる時に當て北方の蠻族押し寄せ來りて都を滅ぼし王を弑せしかば王室は逃れて東に遷り今日の河南省の洛陽に新都を奠めたり、爾來周室の威嚴全く地に墜ち王は只其名を存するのみにて其實なく之に反して各地の諸侯はいやが上にも其勢を高め王室に塌すべき義務も自ら怠り勝になりて恰も獨立の姿を呈しぬ、夫等の國々夥多ある中に齊、楚、晉、秦、魯、衛、宋、燕、鄭、曹、陳、杞は世に春秋の十二國と唱へて最も強大なりき、かくも周の王室衰へて諸侯勃興する時は自ら君臣の大義も何時ごなく消へ失せ臣にして君を弑し子にして親を弑する者あるに至り教化の陵夷風俗の頽敗此時の如く甚しきはあらず、孔夫子は實に此亂

雑の中に生れ玉ひぬ、孔子名は丘、字は仲尼、其祖先は宋の人なり、初め殷の紂王の庶兄、微子啓と云へる人、周朝の第二世に宋の國に封せられしより、子孫世々宋公たりしが、弗父何の時に至りて、其子孫三族に別れ、族中に正考甫と云へるあり、周の太史（記録を司る役なり）となり、孔父嘉を生む、之より後、代々孔氏を稱せり、とぞ、孔父嘉は宗に仕へて、馬術の師匠となり、正實に其職を奉じたりしに、或日、宗の大臣華督なる者、途中に孔嘉の妻の優美なるを見て、騷擾を惹起し、遂に孔嘉を殺せり、此に於て、孔氏と華氏との間に不和を生じ、幾歳を閲しても、底止する模様なかりしが、孔氏の力、遂に華氏に對する、こと能はざるに至り、孔嘉の孫の代に、孔氏は宗の國を去り、魯の國に移り、一小邑の長となれり、之を防叔と云ふ、防叔の子を伯夏と云ひ、伯夏

の子を紇と云ふ、紇は是れ實に孔夫子の父なりけり、されば、孔夫子の祖先は歴々たる一個の大名にして、其家柄の尋常ならざるを知るべし、孔子の降誕は頗る奇なるものあり、父叔梁紇は魯の國の村長にて、勇敢なる軍人たり、初め魯の施氏より妻を迎へて、九女を生みたり、しも一人の男子なく、唯側室の子に孟皮と云へる跛者の男子ありしのみ、是に於て、紇は更に顔氏に婚を申込みたり、時に顔氏に三女あり、顔氏深く、紇の名族より出で、將來頼み多き人物なるを察し、其請を諾して、三女に勸む、此時頭の二女、孰れもためらひければ、季女進みて曰く、父上こそ之を決し給ふべけれと、顔氏答へて、然らば、其許こそ適當の人なれとて、遂に第三女、其名の顔徵在と云へるを、紇に娶らせたり、此時、紇は早や七十の老翁な

りしが翌年孔子の誕生を見る
 に至りしと云ふ、
 後日大偉人ともなるべき人は
 其幼時既に凡人に異なる所な
 かるべからず、されば孔子は生
 れて
 僅かに三
 歳に
 して
 父を
 喪ひ



母親の優しき監督の下に育ちたり
 しかば自ら期する所ありけん五六
 歳の頃より遊戯するにも常に俎豆
 を陳ね禮容を設けなごして苟にも
 無益の事に時間を費やさず亂れが
 はしき其頃の世の中は洵に衆童
 に秀でたる行ひを表はしたり、十五
 歳の時始めて學問に志を向けたり
 しが彼の惻潑にして自ら君子の風
 あるを追々魯國內に知れ渡りし者
 の大夫役を務めたる孟釐子と云へる
 人病て將きに死せんとする
 に莅み其子懿子を誡めて曰へるに
 は全体聖人とも云はるべ



き人の子孫は多くは一國に君臨するものなれど若し左なくば
 必ず徳高く學博き達人の出つるものなり今孔子を見るに年若
 くして禮節を好み學問に勵む是れ必ず聖人の後たるに疑ひな
 かるべし予死なば必ず孔子に師事すべしと釐子卒して懿子父
 の遺言を守り南宮敬仲と共に孔子の弟子となれりとぞ此一事
 を以ても當時孔子の令名は遙かに魯の朝廷にも噂さの種子と
 なりしを知るに足るべし、
 十九歳の時孔子は其祖先の國なる宋の開官氏の女を娶りて妻
 とし間もなき中に魯國の委吏の役目を仰せ付けられしが能く
 其任を盡し公平に事を處したりしかば翌年司職吏に陞叙せら
 る、此歳孔子一男を生み其事上に聞へたれば魯の君昭公は二疋
 の鯉を賜ふて祝し給ふ、孔子徐ろに君恩の辱きを感じ永く其光

榮を留めんとして子に名くるに鯉の字を以てしたりと云ふ、孔子
 二十二歳の時より子弟の教育に従事したりしが聖人の教を受
 けんとして門に聚るもの頗る多かりき、孔子は敢て謝禮等を求め
 ず唯醇々として子弟を導くを以て悞めり、彼は子弟を教ゆるに
 此方より眞理を説き聞かせるの方針を執らずして子弟をして
 自ら其智能を啓發せしめんことを務めたり、されば孔子の言に
 一隅を示して他の三隅を悟ることの出來ざる者には予教を繰
 返さざるべしとあり、以て孔子の教育法の一斑を伺ひ得ん
 かゝる間に孔子二十五歳の時母顔氏卒す、孔子其葬式に當り熟
 々古禮を稽ふるに昔は兩親は別々に葬りしものなるに周公
 以來合葬の禮行はるゝに至り衛の國にては少し間を置きて合
 葬すれど魯の國にては全く同所に葬るの習ひあるを知り又詩

にも死すれば則ち穴を同うすごあるに従ひ壯嚴なる式を以て父と共に母を防の地に合葬したり當時支那の古例に依れば死者に墓を建てるは例なれど墓の上に土を盛りて墳を設けることはなかりき然るに孔子熟々前途の成行を攷ふるに已れば將來泛々として諸國を漂ひ廻り大道を擴むるの責を負ふべき者なれば永らく故郷の空を離るゝごあるべしかくては兩親の墓も見分け難き場合にも立至らん恐れあれば何か見易き標を立てん者をこて遂に墓の上に四尺餘りの墳を作りたりご云ふ孔子の父母を思ふの情の深きは之にて察せらるべきに彼は只に墳墓を作るのみにては禮の薄きに過ぎるご思ひ更に墓側に庵を設けて三年の間父母の喪を服したり洵に感すべきの至りにこそ

三年の喪終つて孔子は魯に止り専ら子弟の教育に従ひ旁ら支那の歴史、文學、制度等を研究したりしが偶々郷子ご云へる小國の君魯の國に來朝し朝廷の宴に際して黃帝以來の官名を語りしごごあるを聞き孔子則ち郷子に就き親しく之を學ひたり爾來二十九歳に至るまで名高き樂人師襄ご云へるに就きて琴瑟の術を學び彼が三十にして而して立つご言はれし如く此頃には十有五年以來研鑽を嘗めたる彼の自信も愈々堅くなり今は只之を天下に訴へ之を世人に紹介せんご只管其折の來るを待つのみ

周の景王二十三年孔子將さに周の都なる洛陽に往かんごす此に於て前に孔子に師事したる名族南宮敬叔は魯の君に請ふて孔子に賜ふに一乗の車ご二匹の馬を以てせらる孔子周に至

り禮を老聃に問ひ樂を萇弘に學び傍ら周室の起源宗廟の儀禮
等を尋ね一日太祖の廟に詣でしに緘金之銘なる者あり其銘に
古之慎言人也、戒之哉、無多言、多言多敗、無多事、多事

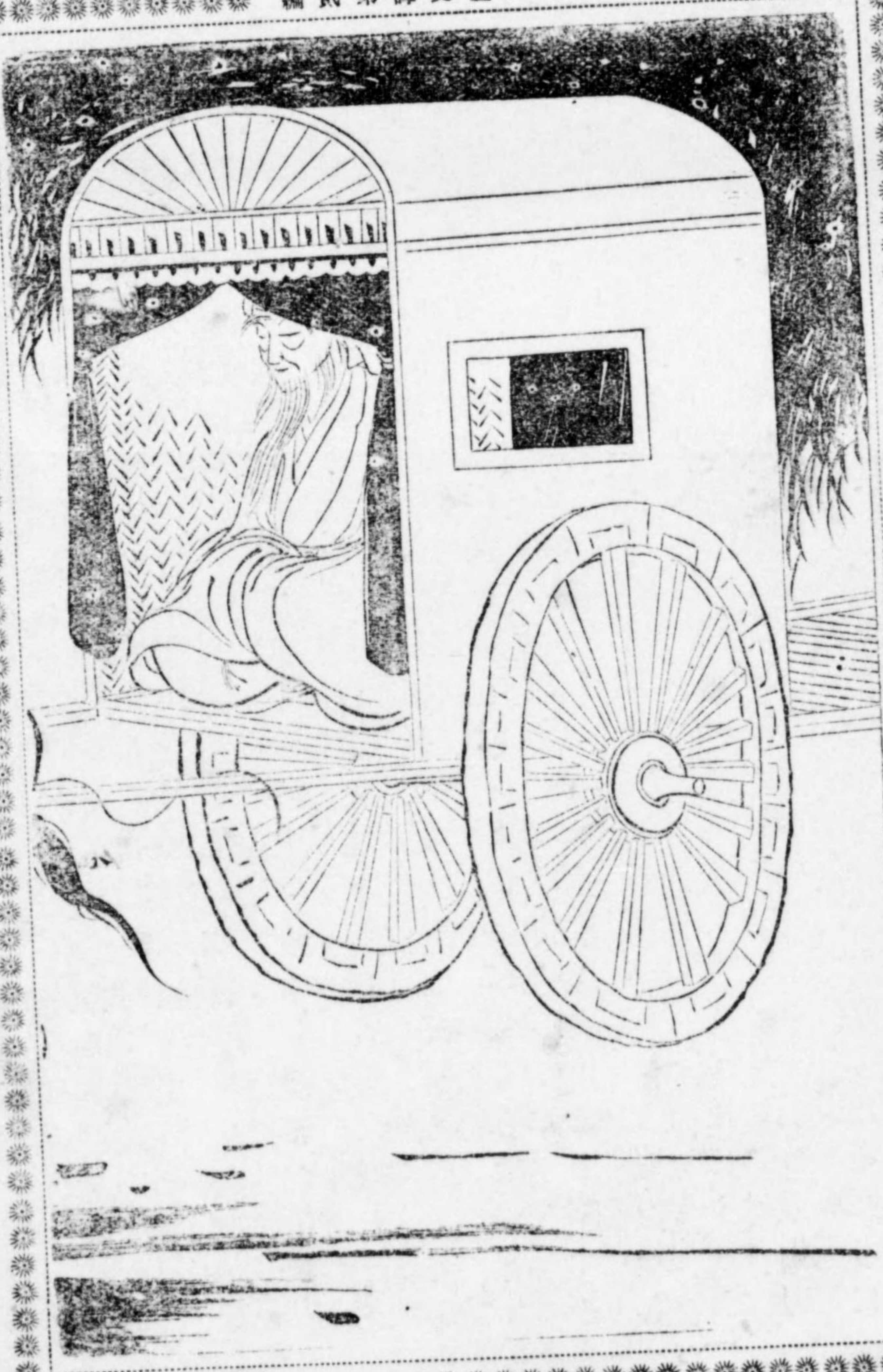
多患

ごあるを見喟然として歎じて曰く予今に至て始めて周公の聖
たるを知る周の天下に王たるに至りしも無理ならぬ事ごもな
りご深く周公の徳高きを感じたり、樂師萇弘孔子の人ごなりを
評して或人に語りて言ひけるには孔子は洵に聖人の表しあり
口に唱へる所は何時も先王の道にして其行ひに至ては謙遜な
り而も博聞強記學問の深き窮りなし彼こそ聖人の此世に現れ
給ひし者ごぞ申すべけれご、萇弘の見る所能く其真相を伺てり
ご謂ふべし、當時周に住せし老聃ご云へるは後世支那の道教ご

云へる一種の宗教を開きたる秦斗にして今日の所謂哲學者な
り其説く所は幽邃玄妙の奥理にして宇宙を解釋するに唯一の
理想を以てしたるものなり、されば周にては知名の碩學たりし
に相違なかりしかば孔子即ち之を訪ふて其説を聞きたるなり、
孔子周を去らんごするに及び老聃之を見送りて曰く予嘗て聞
くに凡そ富貴なる者は人の見送りに財を贈るが例なれご苟も
仁の道に志ある者は嘉言を贈りて其赤心を表すご、予設令へ身
富貴にあらざれごも心は仁の道に熱中せるものなれば今子を
送るには財を以てせずして寧ろ一言の文句を以てせん、抑も聰
明深察にして將さに死に近かんごする者は好て人の善惡を吟
味するものなり又博辨の者にて好て人の惡を發かんごする者
は自ら其身を危ふするものなり、人の子たる者は其身は父母の

有たることを忘るべからず人の臣たる者は君に仕へ身を保ち
 行を全ふするの務を怠るべからず孔子深く老子の言に感じ
 周に留まること久しからずして魯に歸り學識愈々高く業を受
 くるの子弟愈々増加したり嘗て弟子に語て曰く鳥は吾れ其能
 く飛ぶを知る魚は吾れ其能く遊ぶを知る獸は吾れ能く其走る
 を知る走るものは網を用ひ遊ぶ者は綸を用ひ飛ぶ者は罽を用
 ひなば之等捕ふるに容易のわざなるべし但だ獨り龍に至
 りては吾れ其如何にして風雲に乗して天に登るかを知る能は
 ず吾れ老子を見るに夫れ猶龍の如く洵に測り知る可らざるな
 りと老子が宇宙の奧理を窮むるの深きに至ては孔子も之を仰
 ぎて感歎したるはさもあろべき事になん
 孔子魯に歸るや偶々太夫孟叔季の三家政を肆にし遂に其君昭

公と干戈を交ゆるに至りしが不幸にも是非處を異にし昭公敗
 れて難を隣邦齊に避けたり孔子嘗て齊國に帝舜以來の樂の保
 存せらるゝの噂を耳にし夙に齊國を慕ふの情厚かりしかば今
 や君昭公が奸邪の臣に逐はれて齊に逃れ給ふを機とし孔子亦
 之に従ひて齊に赴き親しく其音樂を聴き興味骨髓に徹したり
 と見へ三月の間肉の味を知らざるに至り歎じて言へらく帝舜
 の樂を作り給ふ斯程に美を盡したりとは夢にだも思はざりき
 と學に厚くして寢食を忘るゝに至るとは此の如きをぞ稱する
 なれ今の人の寢食を思ふて學問を爲すに較ぶれば天地の差も
 啻ならざるべし世の人少しく孔子に鑑みる所あらまほし
 孔子齊に赴く途中に面白き出來事あり孔子の一行が或山の
 麓を過ぎける折しも一婦人の墓側に坐して悲歎に沈み頻りに

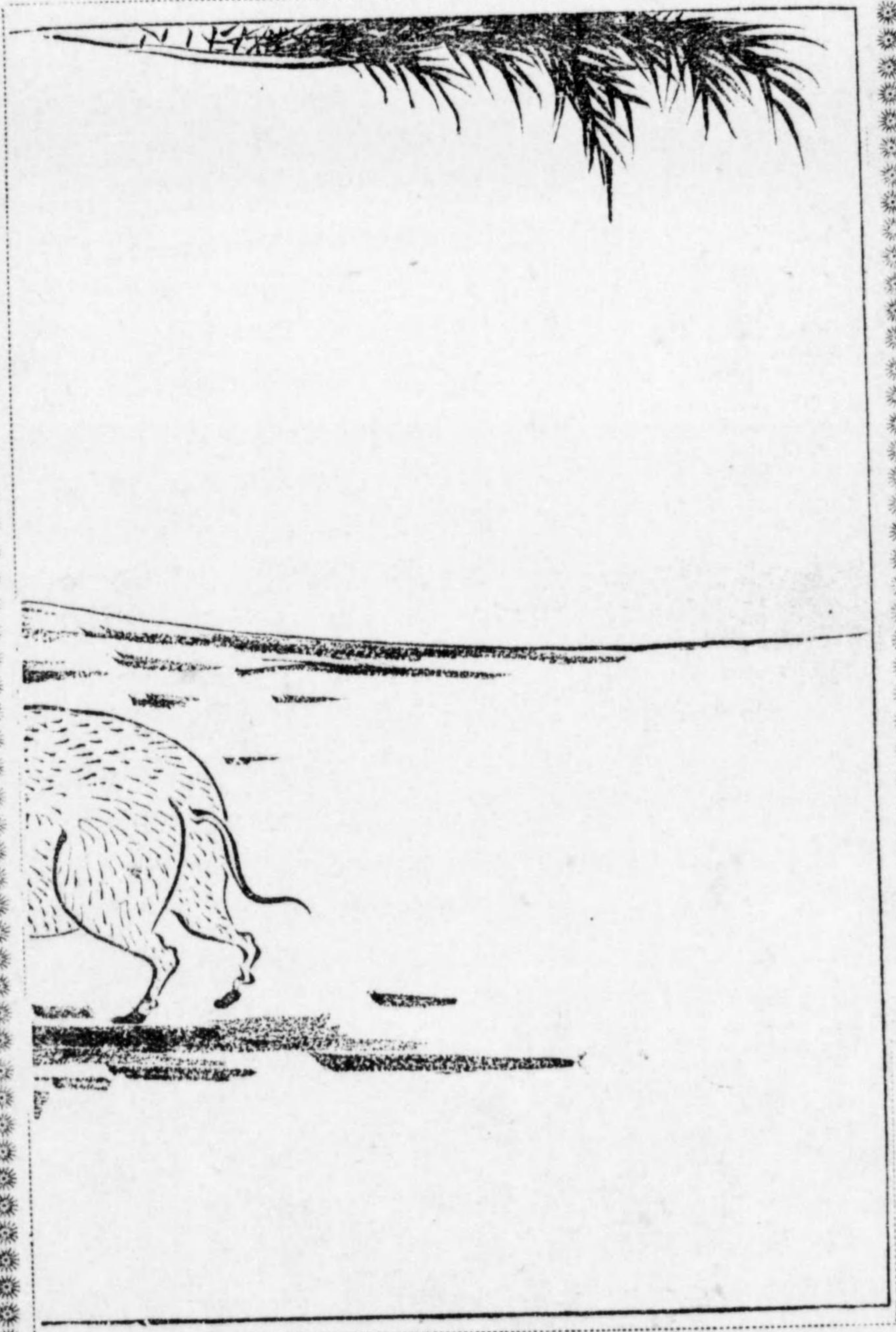


涕泣せるあり、孔子之を見て暫らく車を止め門弟を遣はして其
 何故なるかを問はしむ、婦人答へて曰ひける様、妾が斯く泣き叫
 ぶは、只事にはあらず、前に妾が舅は果敢なくも此處にて猛虎
 に殺され尋で妾が夫も亦其餌に掛り、今妾が愛しき子も亦々同
 じ運命に陥りたるが故なりと、孔子更らに問ひけらく、さらば何
 の仔細あつてぞか、よる危き場所を去らざるぞと、婦人答へて此
 處には苛酷の政なければなりと、言ひければ孔子大に其一言に
 感じ門弟を顧みて教へけるに、汝等能くく、記憶し置くべし、苛
 酷の政は虎よりも猛く、人民には思はるものなる事を、孔夫子
 が些細の事をも看過せずして探て以て子弟教訓の用に供する
 の深き聖賢君子の明なくんば焉んぞ之を能くせんや、
 嘗て齊の景公其臣晏嬰と共に魯の境に狩し給ひしことの序

でに魯の國に來り禮を孔子に問ひしことあり、其時の話に景公
 孔子に問はれけるは昔し泰の穆公となん申す君は其領せらる
 國は小さく然も片隅に偏在せるにも拘らず當時覇者となり
 て他國までも威し給ひたる程の勢を得られしは何故ぞや孔子
 答へて曰く泰の國は小さけれど志す所は洵に大なり、又片隅に
 位すとは云へ其行ひ正しく穆公人を見るの明ありて百里奚と
 云へる賢人を下より引上げて之に天下の政を委ね給へり、され
 ば秦の國が覇者となりて勢を振ひしも當然の事なりとありけ
 れば景公大に感服せられしとなん、爾來景公には深く孔子を慕
 はれしが今や孔子が主君に従て齊の國に來るに際し景公は大
 に之を歡待せられ、親しく孔子を召して政を問はる、孔子論じて
 曰く凡そ一國の君たる者が君たるの事を行ひ臣たる者は臣た

るの道を君に竭し、又人の父たる者が父たるの責任を完ふし子
 たる者は子たるの義務を父に盡さば天下の治まらざらんこと
 を望みても得可らずと景公曰く眞に若し君君ならず臣臣たら
 ず父父ならず子子ならずんば粟ありと雖も吾豈に得て而して
 之を食はんやと、當時齊の國政漸く衰へ君臣の義父子の親も稍
 や秋風に吹き去られんけはひなりければ、政の大要を問はるゝ
 に於て孔夫子斯くは答へけるこそ、其後景公復た政を問はれし
 に孔子答へて財を節するこそ第一の急務なれと曰はれけるこ
 かや、經費節減の國家に緊要なるあながち今日に始まるにはあ
 らずかし、三千年の遠き昔に既に孔夫子の説き給ひし格言なり、
 聖人の一言一句は萬世に通ぜざること無きは之を以ても知る
 べく、唯聖賢の言を行ひ且つはそを守るここの厚薄如何に依り

て國家の治亂、賢愚のけじめも生ずるなれ、愼むべき事にこそ、さ
 て景公は孔子の忠言に感じ孔子に尼谿の田を賜ふて之を封ぜ
 んとし給ひしに齊の朝臣中孔子を嫉む者多く遂に孔子を景公
 に讒するに至りたれば孔子は己が説の畢竟用ゐられざるを知
 り遂に齊の國を去て魯に歸りぬ、
 空なつかしき故郷には歸りしものゝ、それより十有五年が程
 は何の職をも務めず閑靜なる生活を送りて只管子弟の教育と
 學問の研究に心を委ねたり、蓋し當時魯の國は以前よりの騷動
 引續きて國に秩序なく國君は猶外國に在して奸臣政を弄びし
 が昭公卒せられて定公立て魯君とならるゝに及び事漸く收ま
 りしも君公の威嚴は返て地に墜ち、之に反して政を專にしたる
 季、叔、孟の三家の家臣は勢主家を凌ぐに至り、中に就き陽虎、公山



不佞の二氏は特に著しく陽虎は嘗て季氏の桓子を囚へて獄に幽し共に和議を結びて桓子を釋せし以來益々季氏を輕しめるに至りし程なれば魯國の正道紊れたること思ひ遣らるべく孔子夫子たるべき人が世を離れ給ひしは無理ならぬ事と謂ふべし孔子が當時の塵の世の中に如何にして身を處し給ひしかに就きて面白き話もあり或時陽虎孔子に面謁せんと思ひ之を招きたるに孔子其請に應ぜざりしかば陽虎如何にもして孔子を家に呼ばんと欲し禮に一國の太夫たる者が士に物を賜はる場合には已れの内で貰ひ流しすることは出來ず必ず太夫の門に往て禮を述べざるべからざるを知り孔子は禮を重んずる人なれば吾れ若し太夫の資格もて彼に物を贈らば吾家に来るこそ別條なかるべしと案じ使を以て孔子に豚を贈りけり孔子

其謀を察しけるにや潜かに陽虎の不在を伺ひ其家に到りて謝して歸らんとする折しも途中にて陽虎に出で會へり陽虎孔子に謂て曰く予と共に來れ吾れ子に語る所あらんとす孔子を諷して曰へるには胸裡に道德を藏めながら一國の迷亂を救はざるは抑も之を仁者と云ふを得べきや孔子答へて曰く不可なり然らば事に從ふことを好みて何時も其機會を失するは之を智者と謂ふを得べきやと陽虎が頻りに孔子の仕官を促がしたれども賢者は小人に齡ひせずとかや孔子は遂に應せずして偏へに詩書禮樂を修め遠近を厭はず集り來る子弟を教育したりしは其卓見とや謂つべし、
かゝる程に魯國の内亂も追々下火となり定公の九年に陽虎勝たずして齊國に逃れしより國內恰も重荷を卸ろせし如

くになり孔子をして折あらば官に仕へんも苦しからずと思は
 しむるに至りぬ幾何もなく其機到り同じ年の暮に中都宰に任
 ぜられたり孔子則ち生を養ひ死を送るの法を發したればつか
 の間も立たぬ中に庶民の風俗習慣大に改まり老ひたるも若き
 こは食を異にし強き者も弱き者も其負擔に輕重あるに至り
 男女塗を別にし道遣れるを拾はず器に不正の彫刻なく又死者
 には四寸の棺五寸の槨を用る墓は丘上に設けて墳せず樹木を
 植へずこの一定の掟を立てられたれば四方の君皆之に倣はん
 ここを競ふに至れりこそ定公此法を見て驚き孔子に問ふて曰
 く此法を擧げて魯國を治むるを得べきか孔子答へて曰く天下
 に施すも不可なきなりと定公即ち孔子を擧げて司空の役目と
 爲す孔子此に於て國土を檢閲して大に農業の進歩を謀りたれ

ば忽ち其功によりて司法の長官たる大司空の役に拔擢せらる、
 民心の歸服頗る甚しき者ありけん幾何もなくして罪人の數次
 第に減少し遂には刑法あれども其用を爲さざるに至りしと云
 ふ聖賢の徳も亦偉大ならずや、
 定公十年春齊國と和を媾す夏齊の太夫黎鉏と云へる者景公
 に奏して曰く魯國孔子を用るば其勢ひ必ず齊國を危ふせん
 焉んぞ使を魯に遣はし速かに好和を爲さるや彼れ孔子は
 禮に長すれども勇氣なし若し其機に臨て萊人をして兵器を持
 たしめ魯公を劫かさは必ず志を得ん景公之れに従ひ魯公と
 夾谷に會合するこゝなれり夾谷は今泰安府萊蕪縣にあり
 定公將さに乗車を以て赴かんこ給ひしが時に孔子は宰相の
 事をも攝行するの身分にしあれば薄々齊の密謀を感じけん定

公に奏して曰く臣聞く文事ある者は必ず武備あり、武事ある者
必ず文備あり、古へは諸侯たる者國境を出る時は必ず官を具へ
て以て從ふ請ふ左右の司馬を具へん、定公之を諾し左右の司
馬を具へて齊侯と夾谷に會す、齊魯の兩公會見の禮畢るや齊の
有司走で進て曰く請ふ四方の樂を奏しては如何と景公之を許
せしかば忽ち萊人は旄旄羽被矛戟劔撥とやら名くる軍用の器
を手に持ちて噪ぎながら出で來りければ孔子之を見て階を登
り袂を舉げて叱して曰く吾兩公好會を爲すに夷狄の樂を以て
するとは甚だ心得ぬことなりとて有司の者に其退去を命じけ
るに萊人共有司の命にては中々退去する模様もなかりしかば
孔子左右に並み居たる景公と晏子の兩人をにらみ付けしに景
公心に其勇を恐れ臣下を麾ひて萊人を去らしめたり、しばらく

ありて齊の有司又々走り出で、奏して曰く希くは宮中の樂を
奏せん、と景公之を諾せしかば優倡侏儒の輩戯れ跳りながら進
み出たり、孔子大に其無禮を憤り更に階を登り叱咤して曰く
匹夫にして諸侯に無禮を加へるは其罪正さに誅すべきもの
なりと有司に堅く命じて之を罪せしめたり、景公此様を目撃し
て大に恐怖の念を起し夾谷の會終りて齊に歸るや其群臣に告
げて曰く魯の國にては洵に孔子の如きありて君子の道を以て
其君を輔翼するに獨り我齊國の臣民は夷狄の道を以て予に教
へ込んだ爲めに此度夾谷の會に於ては面目なき失策を取りた
る次第なり之を如何せば可ならん、と有司則ち進み對へて曰く
君子過ちあれば則ち謝するに質を以てし、小人過ちあれば則ち
謝するに文を以てす、君若し之を悼まば則ち謝するに實を以て

せよとありければ齊公乃ち侵す所の魯の鄆汶陽龜陰の田を歸して過ちを魯公に謝したりとなん、夾谷の會合は齊國が魯國をいじめん策略にてわざと開きたるものなりしに齊國の方にて孔子を文弱にして武備なき者とあきらめたることこの案に相違したる一事の爲めに見苦しき失敗を來せし所以なり、さるにても孔夫子が單に禮儀の道にのみ凝り給はて事に臨て凜乎として撓まず屈せず憶せざるの眞心は世の僞武者に優ること遙かに遠く天下の正道を實踐躬行せば自ら文武の道兼ね備はるもの、徐ろに思ひ當る所あるべし、

孔夫子大司空の職を奉ずること更に二年其事を裁斷するに當て公平を守り訴訟の起るあれば必ず衆人の意見を聞きたる後に其中庸を執て判決を下したりしは司空の職に在る者の須

らく服膺すべき實例なり、孔夫子が裁判するに當ては一般の同情を喚起せしめて以て公衆の判決を採用するを目的としたるは恰も今日英國の裁判制度に相符合する所あり、偶々父の其子を訴ふるものありき孔子は父子兩人を牢に繋ぐと三月なりしが父終に訴へを止めんとを請ふに至て兩人を赦したりしかば魯の太夫之を訝かり子として父に孝を盡すの義務は國家第一の要務なりと兼ねて主張せるにも似ず斯くも不孝の子を死刑に處せざるは心得ぬ事共なりと孔子に問ひけるに孔子答へて親たる者其責を果さるに子のみを死に投ずるは理に合はぬ事ならずや彼の父は未だ其子に孝順の道を教へたる例しなきに獨り其訴へをのみを採用するは罪なき者を死地に投ずると云ふものなれと言はれければ太夫も亦一言の返事もな

りきごなん、

此頃孔子の門人子路、子游の二人は共に季氏の宰となりて孔子の素志に一臂の助を與へたり、當時魯國紛亂の大原因は季、叔孟の三家が互に城壁を構へて相對峙せること是なり、其様恰も昔し歐洲にてノルマン人跋扈を極めたる時に英國の豪族が城壁を構へて互に雄視したるにさも似たり、されば孔子は常に此等の城壁を毀つに非らずんば魯國の平穩は望み難きを思ひ居たりしが幸ひに門弟の助を借りて其素志を遂ぐることを得、季氏の本據たる費城及び叔氏の據れる郕城を毀つを得たり、此に於て孔子の威勢魯國に高く彼は公室の權を強めて大夫の勢を滅し君を尊びて宰臣を抑制することを務めしかば國政立ころに一變し男子にして忠義誠實を思はざるはなく婦女にし

て貞節良順を心掛けざるはなきに至れり、異邦の人士風の便りに之を聞き魯國に來歴して孔子の道を伺はんとするもの引きも切らずなりにしと云ふ、聖人の徳熾んなる哉、然るにかゝる芽出度御世の松柏の齡ひを待たて唯一朝の露と消え失せしぞ誠に遺憾なれ、そは魯の國の政の譽れ外國に擴りたれば自ら君王の嫉みを受くるに至りしことにて、そが中にも齊公は殊に恐れ給ひ群臣に語り給はく孔子政を爲さば魯は列國の覇者たるに至らんは相違なかるべし、若し然らば魯と境を接する我國は眞先きに滅ぼされん、須らく今の中に何と計るべきなりと、群臣の一人策を上りて曰く先づ孔子を魯の朝廷より除くの道を取らん、と衆皆之に賛したれば、此に齊國の音楽歌舞に長じたる美女八十人を撰び之に文馬三十駟を添へて魯

の君定公に贈るごごなれり、始め樂女文馬を魯の城南高門の外に陳ね季桓子微服して往て觀るごご再三、遂に之を受けんと欲し則ち魯君に語り共に誘ふて女樂を觀るごご終日以て政の何たるを顧みざりき、子路孔子に謂つて曰く先生將さに此國を去るべしと、然るに孔子は去るに忍ひざりき蓋し時恰も春に垂んごし郊祭とて天を祭り膳とて祭肉を太夫に賜ふの大禮近きに迫り居たれば設令へ今魯君女樂に耽るごご大祭の日たらば正道に立歸らるべしと信じたればなり、さるに如何せん魯君齊樂を受けしより政を怠り郊祭を行はず又膳を太夫に致すごごもなく只管齊の樂女に溺れしかば孔子今は是までなりと明らかめ遂に魯の國を去るごごごはなれり、時に年五十を越ゆる六つなりき、齊國の謀其功を奏したるは孔夫子をして爾來十有三

年の間漂泊遍歴のつらき月日を異域に送らしむるの發端ごはなれり、

孔夫子は魯國に於て將に其素志を貫くを得んとするに際して不幸にして一塵の風に吹き消され恨みを吞で故國を立出るの有様ごはなりしが彼は決してそが爲めに生來の精神を屈するごごなく、年は早や五十の坂を過ぎたるにもせよ善政を國家に布かんごの念は露だも失せざりけん、されば之より十三年が程の間諸國の旅路にも常に己を顧問ごし以て將來國家改造の中心たる政府を組織せんご欲するの君公なきやを希望したり、偶々二三の君公の彼を歡待し彼を保護せんご試みたるはあれご彼の志す所を實行し得る程の明君至て稀なりしかば孔夫子の漂歴も畢竟一も得る所なくして終りき、今次に此漂歴時代に

於ける孔夫子の生活を叙せん、
夫子が魯國を去るの後初めに赴きたるは今日の河内省の邊りなる當時の衛の國なりき、老ひて故郷を離るの憂き辛さは徐ろに孔夫子も感じたりけん去るに臨み慚然として一詩を賦して曰く

予欲望魯兮、 龜山蔽之、 手無斧柯兮、 奈龜山何、

こあり、國境を出て故郷を振り返りて眺めんこすれば憎き事には龜山其間に突立て遮りて居る、森ならば手斧にて切り拂は、故郷の空見へもせんに龜山は如何にこも仕方なしと歎ぜられしなり、さもあるべし、

孔夫子の國を去るや夥多の門人之に隨行せり一行衛の境なる儀邑に到りし時其封人出でて一行を迎へ孔子の門弟を慰撫

して曰く夫子が一度位を失ひ國を去りたりとて諸子何をか悲むに足らんや國亂れて正道のすたれたること既に久しきに亘るここなれば天將さに夫子を以て木鐸となし以て正道の教を天下に行はしめんとするなりと、果して孔夫子は本鐸となりて正道を唱へたれども當時之を解するの國も人も至て稀なりければ遂に紊れ果てたる世の中を正しき教の道に引戻すこと能はざりき、されど孔夫子の名聲は既に以前より轟き渡りしことなれば歴遊するの間に差したる窮乏を感じることはなかりき、衛の國に達するや時の顯職を奉じたる顔雝由の家宿す顔雝由は子路の妻の兄に當れば其便りにてあるべし、衛の君靈公は放逸にして頼み少き君にはあれどさすが孔夫子の如き貴賓を輕んじ給ふことなくして直に粟六萬の祿を賜はりたり、然るに



或人孔子を靈公に讒するもの
 ありたれば孔子は罪を得んこ
 ごとを恐れ衛に留まること十ヶ
 月にして將さに陳國に赴かん
 として匡を過きしに一椽事起
 れり、そはも此匡の地は曾て
 彼の亂賊として名高き陽虎の
 爲めに荒されて大に苦みを受
 けしことあれば此地の人民は
 深く怨みを抱ける際偶々孔夫
 子の容貌陽虎に類せる所あるを見是れ必ず陽虎其人ならん
 早合點して孔夫子の一行を止めて之を圍むこと五日に及ひた



れば門人馭者の者共皆驚きて爲す所を知らず、孔夫子は毅然と
 して少しも懼れるの色なく自ら琴瑟を鼓して己れの只人にあ
 らざるを歌へり、曰く周の文王既に没して此方禮樂の道は自分
 の身上に掛り居る、若し文王の死と共に天が斯道を滅ぼしたも
 のならば自分共後進の輩は此道に與ることは出来ざりし筈な
 るにかくも今自分の双肩に此道を負ふて居る様の者なれば天
 も此道を滅ぼさんことは好まざりしに相違なし、天若し此道を
 滅ぼすことを好まずんば匡人ごも天に逆ふて自分を害するこ
 とは爲し能はざるべしと、匡人此歌を聞て其始めて陽虎にあら
 ざるを知り圍みしやからも忽ち散退せり、孔夫子は幸に事なき
 を得たりしが遂に陳に赴かずして再び衛に歸り來りたり
 孔夫子途にて以前宿したる家を訪ひしに恰も其主人死して

葬禮を行ふの折なりしかば夫子は痛く悲みて之を吊ひけり、夫
 子悲みの餘りに車に繋ぎたる馬一疋を解きて賻と爲さんこと
 を門人子貢に談りたるに子貢其餘りに過當なるにあらざるや
 と諫めければ、夫子答へて予家に入て喪主の如何にも悲歎に沈
 めるの様を見て覺へず涙潸然たり、豈に之を表はすものなくし
 て可ならんや、子須らく之を爲せと曰れける、とぞ、葬禮の悲きは
 何處も同じ事ながら、餘所人は大方他人の葬式に儀式ばかりの
 同情を現はすこと常なるに、孔夫子の如きは眞に人の悲みを悲
 む者と謂ふべけれ、孔子衛に歸るや、蘧伯玉の家を寓す、此蘧伯玉
 と云へるは頗る賢明の人にて、孔夫子も之を譽め給ひし衛の太
 夫役なり、其後蘧伯玉使を孔子の許に遣はしたることあり、孔子
 其使を坐に招き之に問ふて曰く、主人は何事をかなさるゝぞと

使答へて曰く主人は常に其身を省み己を制して少しにても過
 ちなからんことを心掛け居らるれと思ふ様に事成らずごあり
 ければ孔夫子深く其使の言に感じ益々蓬伯玉の賢なるを知り
 たりごなん、夫子は衛に留まること短かよりしが靈公の夫人に
 南子ご云へるあり奸計に富み邪智に長ぜるの人なり、曾て人を
 して孔子に面會せんことを求めらる孔子之を辭したれども其
 禮なるを知り遂に止むを得ずして面會したり、夫人絺帷の中に
 在り、孔子門を入り北面して稽首するや夫人帷中より再拜せら
 る環珮の玉聲瑯然として響きしご云ふ、此時子路は孔夫子がか
 らる夫人に面謁せしを喜ばざりしかば孔子之を慰めて誓つて
 曰く予若し禮に合はず道に悖るの行ひあらば天必ず予を棄て
 んご、然れども畢竟夫子は衛の朝廷に永く安んずるの意なけん

一日靈公夫人ご車を同うし夫子を後車に乗せしめて市中を周
 遊したり、靈公以て夫子を好遇するの志にてありしならんに市
 民は其不適當なるを見謠ふて曰く前車には懶惰の乗るあり後
 車には賢者の乗るありご孔子之を聞て深く恥ぢて曰く吾れ未
 だ徳を好むご色を好むが如き者を見ざるなり、ご衛の留まる
 に足らざる國なるを知り遂に衛の國を去れり、
 夫子衛を去て陳に赴かんご欲し道すがら曹を過ぎて宋に到
 る、偶々夫子其子弟ご共に大樹の下にて禮儀を講し給ひしに宋
 の太夫司馬桓魋夫子を憎みて之を殺さんご欲して其樹を抜き
 たり、弟子大に驚き速かに此地を去らんごことを以てす孔子曰く
 天徳を予に生せり桓魋それ吾を如何にするを得んやご、是より
 夫子は西方鄭の國に向ひたりしが鄭國の門に達せんごする道

にて子弟等後れ夫子先つ獨り郭ごなん呼べる東門にイみ給ひたり、此時鄭の人姑布子卿ご云ふ者夫子を見て子貢に語りて曰く東門に人あり其額は堯に似て其項は臯陶に類し其肩は子産に類す然れども腰より以下禹王に及ばざるこそ三寸纍々ごして喪家の狗の如しご子貢具さに斯々の次第なりしご有りの儘を夫子に告げければ孔子欣然ごして笑つて狀の事は未だ知らざれご喪家の狗に似たりごはさもあるべしご曰はれたりごなん、孔子既に陳に適きて太夫司城貞子の家に寓するこそ一年餘り或時隼飛び來りて陳の君湣公の庭に落ちて死す之を見るに楛矢もて射貫かれ居たり其矢の長さ一尺八寸ありて鏃は石にて作れり、湣公之を怪み使を以て孔子に問ひ給ふ孔子對へて隼の來る事遠し是れ肅慎の矢なり、昔し周の武王商に克ち道を九

夷百蠻ごて東方のゑびすに通じ各其國にある財寶を以て貢物ごせしめらる其時肅慎より楛矢を貢せり武王令徳を昭にせんご欲し陳國の先祖へ其矢を分ちあたへ給ひしごありご曰ひしかば湣公試みに古き倉庫を捜し見たるに果して楛矢あり、湣公を始め陳人深く孔子の博學に感じけりご云ふ孔子陳に居給ふご三歳此頃晋楚の二國強きを争ひて交るく、陳を伐ち吳の國も又陳を侵すに至り孔子陳を去て蒲の地を過ぎけるに蒲の人公叔ご云ふもの上に畔き蒲を押領しけるが孔子をさへごめて許さず時に孔子の弟子に公良孺ご云ふものあり自ら車五乗を以て孔子に従ひしが其人賢にして勇力あり孔子に云ひけるは吾夫子に従て前きにも匡にて難に遭ひ今又此處にて再び難に罹る是れ天の命なり今夫子の爲めに戦つて死すべし

ごとて闘ふこと甚だ激し蒲人之を恐れて若し衛の國へ適くこと
 なくんば許して出さん云ひける故孔子堅く盟を立て給ひた
 れば蒲人孔子を東の方の門より放ち出しけり夫より亦衛へ適
 き給はんことせしに子貢盟は背かれまじと云ひければ孔子蒲人
 に盟ひしは是非なくして盟ひしなれば神も聽き給はず故に背
 きても罪なしとて遂に衛に適き給ふ爰に衛の靈公は孔子の
 來り給ふこと聞き喜で自ら國の外まで遠く迎に出で給ひけりさ
 れど靈公は老て政事を怠り孔子を用ひざりしかば孔子歎じて
 曰く苟も我を用ゐる者あらば一年にして教へ三年にして必ず
 國家を治めて霸王にもなすべきに孔子遂に衛を去る時に魯
 の南なる晋の國に趙簡子の領地なる中牟と云ふ所あり佛肸と
 なんいへる者其地の宰なりしが趙簡子が范中行を攻めて中牟

を伐つに際し佛肸中牟を押領して叛し使を遣はして孔子を呼
 べり孔子まさに行かんことせしに子路悦はずして前に夫子に
 聞くに君子は不善を爲す者の國には入らずと曰ひしに今佛肸
 は中牟を押領して主君に叛きしものなり然るに夫子自行か
 んこと給ふは如何なる事ぞといふ孔子之を聞き予曾て其言あ
 り夫れ至て堅き者は鷹げども薄からず至て白き者は染むれど
 も黒からずと對へき蓋し孔子聖徳あれば濁りの中にもありても
 汚れずこの意を述べられたるものなり然れども遂に往くこと
 を果さざりきと云ふ

孔子衛にて志を得ず西の方晋の國に往きて上大夫の趙簡子
 に見へんことを思ひ黄河の岸に達せし時晋の賢太夫と聞へし
 賽鳴犢及ひ舜華の二人が殺されたりと聞き河水に臨で歎じて

曰く美なるかな此河水の洋々たること我此河を濟らざるは命
 なり彼の二人は晋の賢人なり趙簡子未だ己が志を得ざる時は
 彼二人に従ひしが志を得るに及て是を殺す是れ不義なり鳥獸
 さへも不義に居らず況んや我に於ておやと遂に趙簡子に見へ
 んことを罷めて還り後に陬操と云ふ曲を作りてこれを哀み給
 ひけるごぞ孔子衛に還りて再び蘧白玉の家に宿し又衛の靈公
 に見へ給ひけるが或日靈公兵陣の事を問ひしかば□子曰ひけ
 るは我れ俎豆の事は嘗て之を聞けり軍旅の事は未だ之を學ば
 ずと對へたり明日又衛公と談論せるの時折しも空に一群の蜚
 雁來る靈公孔子の道を説き給ふをも餘所にして只管これを仰
 ぎ見給ひて孔子を敬ふの色見へ給はざりしかば孔子は其
 用ひられざるを知り又々衛の國を去て陳の國へ赴きけり、

魯の哀公三年孔子六十歳の春を迎へ給ふ其夏魯國に火の災
 あり孔子時に陳の國に居り之を聞て曰く其災ひ必ず魯の君桓
 公、僖公の廟にてあらんと果して其言の如くなりしと云ふ其秋
 魯の季桓子病て將きに死なんごす輦に乗りて遙かに魯城を見
 喟然として歎して曰ひけるは前きに此國孔子の教によりて
 聖道興り魯國も一度は太平を極め繁昌したれども我れ君と共
 に齊の國より献上したる女樂に溺れて孔子の言を用ひざり
 し爲めに魯國は遂に起らず今に至て後悔の至りなりと其嗣康
 子を振り顧て言ふよう我若し死なば汝は魯國の宰相ともなら
 ん其折には必ず孔子を召し用ひて與に魯の國を治むべしと
 遺言して數日の後桓子没しぬ康子父の遺言に従ひ孔子を呼ば
 んご思ひしに其臣公之魚と云ふ者康子に申しけるは前きに亡

君孔子を用ひければ其業を完ふせずして諸侯の笑を招き給へり今又孔子を用ひて其業を終らずんば再び諸侯の笑ひの種子となり給ふべし諫めけるが康子之を聞き然らば誰をか召して可なるやと問はれしに之魚又曰ひけるは冉求こそ呼ひ給ふべしと康子即ち其言を容れて使者を以て冉求を呼ぶ此時冉求は孔子に従ひて陳の國に在りしが將さに魯の招きに應じて往かんさせしに孔子曰ひけるは魯人の汝を召ぶは些細の事に使ふことにはあらず必ず國家を治めしめんこの大事なるべしと子貢冉求を道に送りて汝魯に用ひられなば必ず孔子を招くべしこの事を托したりとなん其明年孔子陳より蔡の國に遷り給ふ、

亦其翌年蔡より葉の國に往く葉の君孔子の如何なる人なる

やを子路に問ひしに子路知らずと對ふ孔子之を聞て子路に謂て曰く爾何故に其人や道を學びて倦まず人を誨へて厭はず憤を發して食を忘れ樂みて以て憂を忘れ老の將さに至らんことることを知らずと答へざりしやと再び葉を去て蔡に還る路に長沮桀溺と云ふ二人の者並て野に耕すを孔子見給ひて子路をして渡場を問はしめ給ふ兩人孔子を指して彼は誰なるぞやと問ふ子路答へて彼は孔夫子なりといひければ桀溺曰く魯の孔夫子ならば水の渡りは知るべき筈なり今世の中も悠悠として水の流るゝが如し何處にも聖人の道行はるべからず天下皆之なり誰と共にか無道を易へて有道とせんや且つ其人を避くるの士に従はんより世を避るの士に従ふに若かんやとて擾して止まざりけり孔子此を聞き給ひ慙然として曰ひけるは鳥獸と

もに群を同うすべからず聖道の世に行はれざるは其道大にし
 て人小なるが故なりとぞ歎かれける、
 孔子蔡の國に遷りて三歳なる時に吳の國より陳の國を
 伐つ、此時楚の國人陳を救はんために城父と云ふ處へ出陣して
 ありけるが孔子陳蔡の間に在すと聞き使者を遣はして孔子を
 聘せしむ、孔子其禮を喜びて將さに楚の國へ往かんことたまひ
 けるに陳蔡兩國の太夫等之を聞きて談しけるは夫子は賢者に
 して其刺譏する所の者皆諸侯の疾に當る今久しく陳蔡の間に
 留ると雖も諸太夫の設け行ふ處は皆孔子の意にあらず、然る
 に楚の國は始めより大國なり今遙々と使を以て孔子を招く
 と聞く若し孔子楚に用ひられなば陳蔡の爲には誠に不利益此
 上もなし、されば孔子の楚に往くを妨るに如かずとて陳蔡より

兵卒を遣はして孔子を野に圍み其路を遮りたれば孔子
 往くことを得ず糧食は次第に盡きて諸弟子又疲れて起つこと
 を得ざるに至りき、孔子は獨り元氣も衰へず自若として道を
 講し琴を弾しながら歌を咏しなごしてありしかば子路怒て孔
 子に言ひけるは君子も亦困窮することありや孔子曰く固より
 君子たりとも困窮することあり唯小人窮すれば往々非義の業
 を爲すに至ると、孔子やがて弟子等の疲勞を以て快からざるの
 風あるを知り子貢を使ひて楚に往かしめ難を告げて救を求
 む此に於て楚の君昭王軍勢を遣はして難を救ひ孔子を迎へけ
 れば孔子其子弟と共に楚へ赴き給ひたり、昭王書社の地七百里
 を以て孔子の領地となさんとし給ひけるに楚の太夫令尹子西
 と云へる者昭王を諫めて言ひけるは諸侯に使者となりて能く

諸侯を説服する子貢の如き、王の輔佐の臣となりて政を能くす
 る顔回の如き、軍將となりて士卒を率ゆるに妙なる子路の如き、
 又王の奉行を務めて其職を完ふせる宰予の如き、是等は皆孰れ
 も孔子の弟子にして、鏡中の鏘々たるものなり、楚の國廣し、雖
 も此等の名士を得ん、とするは洵に難し、昔し文王は豊の地に居
 り、武王は鎬の地に在り、共に百里の小國を領する君たりしが、遂
 に後には天下の王となるに至れり、今若し孔夫子、此地に領地を
 得て宰相となり、以上の名士之に隨て補佐せば、孔夫子の勢愈々
 強大となるに至るべく、楚の福はならで却て楚の憂となるに
 至るや、必せりと、昭王此に於て其言を容れて、孔子に書社之地を
 與ふることを停めらる、孔子此に於て楚の國を去て、衛の國へ還
 り給ふ、時に魯の哀公六年にして、孔夫子六十三歳なりき、其明年

吳の國の魯君君と繒の地に會し、魯の君に百牢とて、百味の食物
 を請求せらる、蓋し前きに吳人宋の國へ往きし時、宋人吳王の威
 勢を懼れ、諂ひて百味の食物を供へて呈上せしことあるを以て
 今又魯の國へ來りても、其威を振ひてかくは百牢を求めしなり、
 當時吳の國は夷狄なれども、勢盛にして兵強く、屢々中國の諸侯
 を侵すを以て、魯も其勢に怖れ、遂に百牢を備へけるこそ、中國の
 君も道衰へ國弱くなりては、自ら夷狄の君にも辱しめらるゝに
 至るは、素より當然の事にして、豈に獨り二千年の昔に限り、
 や、優勝劣敗の理は古も今も變りなく、國と物との差別なく、所
 如何を問はず、絶へず行はるゝものにこそ、孔子の子弟衛に仕ふ
 る者多かりければ、衛の君孔子を用ひて政を爲さしめんと欲す、
 偶々孔子の弟子に冉有と云ふものあり、魯の季康子に仕へて軍

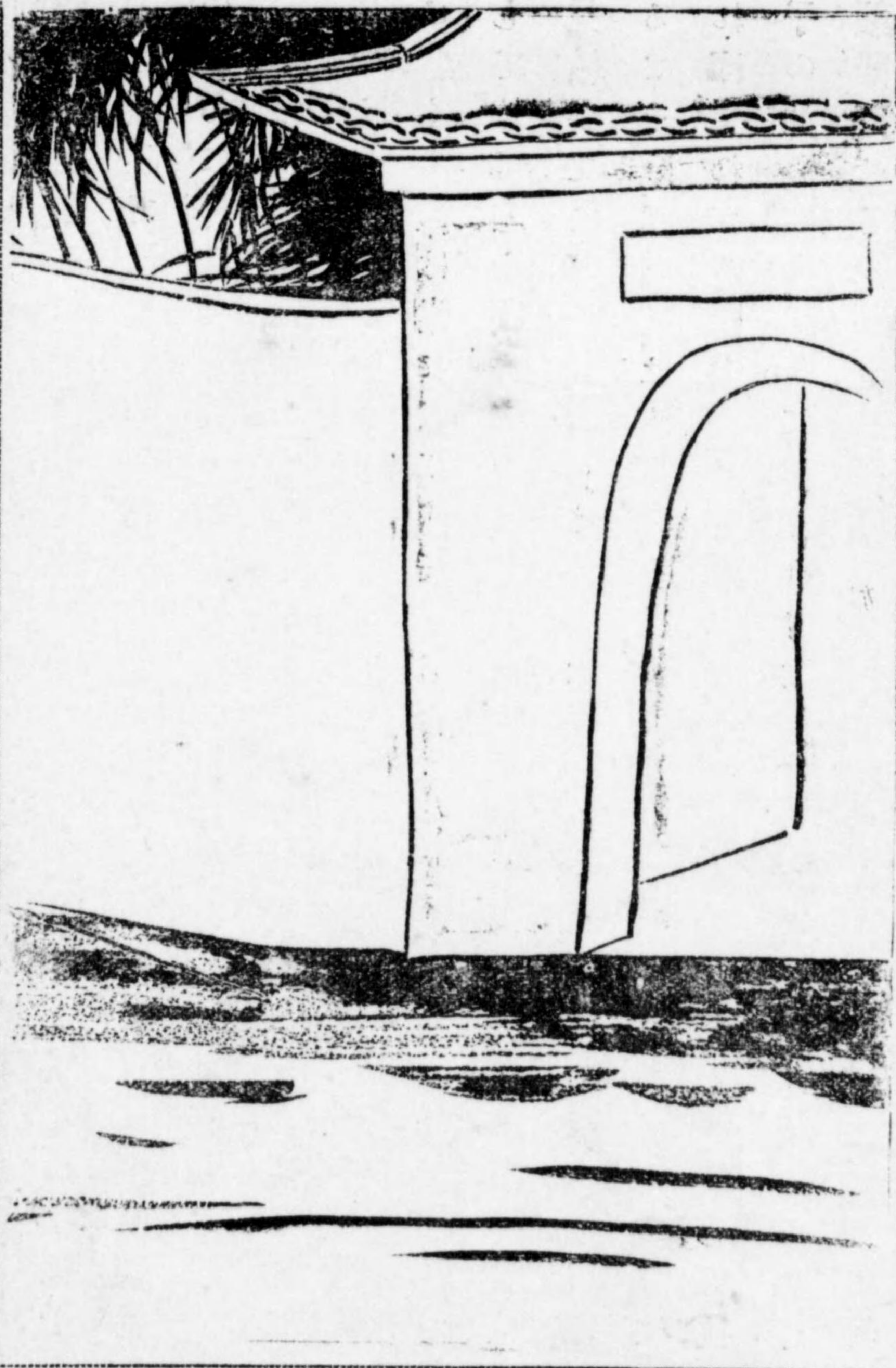
の將帥となり齊の國と郊の地に戦ひて大に勝を得たり、冉有凱
 旋して歸るや季康子其勇なるを見て問ひけるは軍略上の熟練
 は天性の然らしむる所なるか果た學びて得たる所なるやとあ
 りければ冉有答へて之を孔夫子に學びたりと言ひけり、季康子
 更に孔夫子の如何なる人物なるやを問ひしに冉有答へて曰く
 之を用ゆれば名あり之を百姓に播し之を鬼神に質して憾みな
 し然れども之を求むるに道を以てせざれば干社の封を以て招
 くとも來らざるべしと季康子此に於て愈々孔夫子を招かんこ
 欲し使を遣はしけり、此時孔子は衛の國に居給ふ、衛の太夫孔文
 子と云ふ者太叔と云ふ者を攻めんとて孔子に策を問ひしに孔
 子知らずと答へて之を辭し駕を命じて將に衛の國を去らん
 として鳥能く木を擇ぶ木豈に能く鳥を擇ばんやと啣ち給ひけ

るごなん、
 斯くて季康子の遣はしたる公華、公賓、公林なる三人の使者は
 幣物を厚ふして孔子を迎へたれば茲に孔子は十四年目に亦と
 親しき魯の故國に歸り給ふことゝはなれり、實に是れ魯の哀公
 十一年孔夫子六十八歳の時なりき、哀公孔子を召して政を問は
 せ給ひしに孔夫子答へて政は臣下を擇ぶにありと、他日又季康
 子政を問ふ孔子曰く直き者を擧げて諸の枉かれる者の上に錯
 かば即ち枉れる者をして直からしめんと、良臣を擧げて政を爲
 さしめなば佞臣自ら遠かり民皆其法に順ふに至らんことを説
 かれたるなり、然れども魯公遂に孔子を用ゆること能はず、諸太
 夫等も又孔子に隨て君を輔佐し國を始めんと、卓識を抱く者
 なく夫子自らも年老ひて早やせはしき朝廷の務めを奉ぜんこ



の意もながりければ夫子は魯に還り來りて後は世の雜務を厭ふて家に閑居し給ふの有様なり是時世間も既に末となり文王武王の名君國を興してより其後を受け継ぎたる周の天子も徳澤衰へ給ひ堯舜以來の禮樂は廢れ詩書は缺けて用ゆるものもなかりしかば孔子は徐ろに世の中の禮義の紊れたるを憂ひ給ひ夏殷周三代の迹を尋ねて當時の禮樂を知り書傳を序して上は唐虞の際より下は秦の御世に至るまで歴代の事を編纂し給ふ昔しは詩三千餘篇あり孔子其重なりたるを去り禮に施すべきものを取り給ふ凡そ三百五篇あり孔子晩年に及びて始めて易經を得給ふ此に於て大に喜び晝夜を分たず熱心に之を讀み給ひしが爲めに竹に字を刻みて皮にて編みたる當時の所謂竹簡の書も三度程皮の切れたるほごなりしと云ふ其讀書の熱

心思ひ遣らるべし易は天地萬物の理を説きたる者なれば孔子之を讀みて天地萬物の情一として通ぜざるはなきに至り後世の爲めに易の傳を作り給ふ是れ今日に傳われる易經なり魯の哀公十四年の春魯の都の西方なる大野と云ふ處へ狩に出でしに太夫叔孫氏の家臣鉏鉏と云ふ者麟を獲たりそも麒麟と名くる獸は常に世に出でざる獸なれば魯人其尊きを知らずして却て之を不祥なりとて虞人に賜はりける時に孔子之を見給ひてこれぞ麟なりと言はれしかば魯人初めて之を感じけるごぞ麟は昔しより天下治まりて聖人の存する御世にあらざれば現れざる獸なりと支那にて噂せるものなりしが果して孔子の如き聖人の世に出てたりと見ゆ偶々孔子の最愛せる弟子顔回死せるを聞き孔子歎じて曰く嗚呼天予を滅ぼすご切に顔



回の死を悲みたり其後魯人の獲たる麟の空しく死したるを見
是れ天將さに予を没せしめんこの前兆なるを知り嗚呼吾道茲
に窮す我を知るもの遂に無きかと歎ぜられしに子貢何ぞ夫子
を知るものなしとせんやと曰ひければ夫子對へて曰く天を怨
みず人を尤めず下學して而して上達す我を知るものは夫れ天
なるか君子は世を没して名の稱せられざるを病む我道行はれ
ずんば吾何を以て後世に見ゑんやと即ち魯國の記録に因て春
秋を作り給ふ、
或日の朝なりけん孔子夙に起きて兩手を背に負ひ杖を曳き
ながら門前を逍遙して歌て曰く

泰山其頽乎 梁木其壞乎 哲人其萎乎
と暫くありて内に入り戸に對して坐せり泰山梁木の如き丈

夫なる者も毀れると同じく天下の理に明らかにして智識の備
はれる予も將さに命の終る時期の迫れるかなと歎かれたるな
り折しも子貢側に居りて此語を聞て曰く若し泰山頽れなば吾
何をか仰がん若し夫れ梁木壞れ哲人萎まば吾果た何處にか身
を寄せん夫子將さに病まんとするを恐るゝ忙ぎて夫子の門を
訪づれしに孔子曰く賜(賜は子貢の名なり)何ぞ夫れ來ることこの晩きや夫れ
國に明王興らずんば天下誰か予を宗とせんや予將さに死せん
と予言はれたりしが果して其言の如くこれより孔子は遂
に病床の人となれり、
支那の大聖孔子の末路は實に此の如し人の命の終りは何
れも物悲しき者なれごまして孔子の最後に至ては一しほの
憐れを感じるものあり夫子は恰も暗澹たる雲に蔽はれたるに

同しく志す所の期望は一も果すなくして精神爲めに苦痛に沈み天下夫子の教を容るゝの國なく妻子側に侍べりて愛養の慰みを供するなく其有様の如何ばかり悲みの種子なるやは推して知らるべしされど孔子は一言の祈禱を爲さず一片の恐怖の様をも現はさず神の意を奉して力を一世に盡したるの功は夫子自ら感ぜし所なるべしと雖も深く之を胸中に秘して敢て口外せず悠悠々自若こして終に溘然こして永眠せり實に魯の哀公の十六年夫子七十三の齡なりき哀公孔子の卒し給ひしを聞き深く惜ませ給ひ孔子の徳を頌する文を作りて吊ひ給へり諸弟子も之を聞き四方より集まり來りて盛大なる式を營みて夫子を魯の城の北なる泗水の邊りに葬り弟子皆心喪して恰も父母を喪ふが如くせること三年喪畢りて各別れて國々へ歸

りけり獨り子貢は孔子の側を去るに忍びず夫子の墓のほごりに廬を結びて悲み哭すること都合六年にして後去りけりごなん後夫子の弟子或は魯の人にして夫子の徳を慕ひ冢のほごりに室を造りて住居する者百餘家なりしこそ故に魯人此所を孔里ごなん呼びけるごかやされば魯國にては世々相傳へて卒し給ひし歳時を以て孔子を奉祠す又は後々の學者禮を談じ道を講ずる時は先づ孔子の冢を祭りて後に講談を始むること云ふ孔子冢坐の地大さ百畝南北へ十歩東西へ十三歩墓の高さ一丈二尺冢坐の中に奇樹多く其名を知らざる者多し傳へて孔子の諸弟子の中異國の人各其國の樹を持來りて種ゑたるなりご云ふ孔子の居給ひし所の堂は諸弟子の禮樂を學ぶ所ごなしたるが後世に至りて其堂へ孔子在世に用ひ給ひし衣冠琴車書の類



ひを藏めて孔子の廟となし世々之を祠りて漢の世に至り二百
餘年絶えざりしと云ふ、

孔子の容貌に付ては古へより諸説紛々たりと雖も身体長
高く頗る壯剛の姿を備へ給ひしは明らかなるが如し孔子平
日の行ひを察するに故郷の父兄宗族に對しては唯信實を以て
謙遜し物言ふことも能はざるに似たり朝廷宗廟に於ては是非
曲直を明かに辨じて謹慎の意を忘れず上下の太夫に對しては
機に從て剛直和靜を以て接し衣服は禮に從て着し飲食は必ず
攝生の法を守り正しからざれば食せず多飲多食なく食するに
語らず寝ぬるに言はず又祖先の祭りに蔬食菜羹を用ゆと雖も
必ず自ら敬するの誠を表はせり内に在ては父母郷黨親戚に對
するの行ひ外に在ては君公卿太夫に事ふるの状始め終りの差

別なく禮を以て貫き道を以て繋きたるは孔子を措きては洵
に其實を行ふ人曉天の星にも及ばざるなり、
聖賢君子も萬代に仰がるゝの人は生きて世に用ゐらるゝ
こと極めて稀なりと雖も死しては億兆庶民の尊敬を受け王侯
の追賛を辱ふするに至るは洵に其徳とぞ云ふべき死して徳後
世に洽きの君子素より數尠からぬことなれど其徳の高く其萬
世に尊重せらるゝの拔群なるは蓋し孔子一人のみされば孔
夫子の没し給ふや時の君なる魯の哀公は生前之を宰相に用ひ
給ふの明なかりしにも拘らず深く孔子の死を惜み給ひ丁重
なる吊詞を賜はり聖廟を設けて四時其靈を祭りせめて死後の
幸榮を與へんことを命じ世々の習ひとせられたり然るに孔
夫子没してより周の御代は日に月に國勢衰へ終に其後二百有

餘年を経て秦の天下に併せらるゝに至りぬ、秦の創立の君を始皇と云ひ、周の國を滅して從來封建の諸侯を廢して君主獨裁の政を立てられ、頻りに暴逆無道を以て天下の人民を苦めたり、かゝれば、國又國と續きて秦の屬地にはなりぬれど世道人倫は日に地に墜ち暴逆の君たりとも自ら其非を悟れるにや、孔夫子の説き給へる道の暴政を遮きることなし、あはれにも秦の始皇は古來の詩書を悉く蒐めて之を焼き盡し、剩へ當時の儒者其數幾百人と云ふを咸陽と云へる坑に生理めに以て聖賢の教を此世に絶たんとことを企てたり、然れども正道は天之を滅ぼさず、孔子の教は依然として民より民に傳はりて益々擴がり無道を極めたる秦の御世は僅かに二代にして滅びぬ、秦の次に起りたるは漢の御世にして漢の高祖皇帝は深く孔夫子の徳を慕ひて詩

書其他古書の散迭せるを集め十二年魯の國を巡行の折態々太牢を靈前に供へて孔夫子を祀られたり、是れ漢以來孔夫子を祀るの始めにして高帝は天理の人心に在りて自ら泯没すべからざるものあるを察し其精神を以て遂に漢代四百年の基を創められしと、なん、孔夫子の教も亦偉大ならずや、かゝれば孔夫子の子孫は歴世上下の尊敬を受くるは當然の事なり、初め孔夫子に一子あり、鯉と云ふ字は伯魚、伯魚汲を生む字は子思、と云ふ、孔夫子より九世の孫に至るまでは一子相承けたりしが九世の孫魯の文信君に至りて始めて三子を生む、鮒、樹の三人是なり、鮒は六藝に通じ秦の始皇の時魯の文通君と稱せしが始皇書を焼くに及びて鮒は其弟騰と其家語論語、尙書、孝經等と祖堂の舊壁の中に隠し弟子と共に難を避けたりと云ふ、鮒陳

の國に没して其後絶へ弟騰は漢高帝の世に奉祀君に封ぜられ
惠帝の時に長沙太守に遷さる騰忠を生む文帝徴して博士とな
し褒成侯に封ぜらる忠武を生む武は臨淮の太守となる武延年
を生む群書を博覽し武帝の時博士となり大將軍に遷る延年
を生む元帝の初め帝師となり爵を關内侯と賜ひ食邑八百戸を
附加し褒成君と號す霸上書して孔夫子の祭祀を奉ぜんことを
求む元帝詔して曰く褒成君關内侯霸をして食邑八百戸を以て
孔夫子を祀らしめんとして其請を允さる爾來子々孫々魯の舊地
に居住し以て孔夫子の祭祀を掌ることとなりしと云ふ平帝の
元始元年六月孔子に追諡を贈りて褒成宣尼公と曰ひ十六代の
孫均を改め封じて褒成侯と爲し食邑を増して二千戸とせらる
此れ後世孔子を尊崇するの始めにして又諡號を贈るの始めな

り、東漢の光武帝建武五年に魯の國を過ぎて孔夫子の靈を祀
り給ふ尋て明帝永平二年孔子を祭り同十五年帝東に巡行し魯
の國に到りて孔子の宅を訪ひ仲尼及び七十二弟子を祭り親し
く講堂に臨御して皇太子及び諸王に命じて經を講ぜしめらる
孔子在世の時其門に遊びて教を受くるの弟子殆ど三千人あり
しが其中特に非凡の才を抱き六藝に通ずる者は七十七人あり
されば孔子の言に業を受け身通ずる者七十有七人皆異能之士
なりとありて孔子自らも此等の人々をば深く信用し給ひしこ
ご知らる今其人名を擧げんに

- 顔回、閔損、冉耕、冉雍、宰予、端木賜、冉求、仲由、言
- 偃、卜商、顓孫師、曾參、澹臺滅明、高柴、宓不齊、樊須
- 有若、公西赤、原憲、公冶長、南宮縚、公皙哀、曾點、顏

繇 商瞿 漆雕開 公良儒 秦商 顔刻 司馬黎耕 巫馬
 期 梁鱣 琴牢 冉儒 顔辛 伯虔 公孫寵 曹邨 陳元
 叔仲會 秦祖 奚葳 公祖茲 廉潔 公西與 宰父黑 公
 西葳 穰駟赤 冉季 薛邦 石處 懸竄 左郢 狄黑 商
 澤 任不齊 榮祈 顔噲 原桃 公肩 秦非 漆雕從 燕
 級 公夏守 勾井疆 步叔棄 石子蜀 邽選 施之常
 印績 樂欣 顔之僕 孔弗 漆雕侈 懸成 顔桓 顔何
 なり桓帝の元嘉二年詔して孔子の廟に百戸を置き卒史一人
 を置きて諸事を掌らしめ孔子十八代の孫澍を以て魯の國の從
 事させらる此れ孔子の子孫が故郷の官を拜命したる始めなり
 こそ靈帝の光和元年に至り始めて鴻都門學と云ふを起され孔
 子及び其弟子の像を畫かしめられたり、

其後漢滅びて三國の世となり魏の文帝黃初二年孔子二十一
 代の孫羨を以て封を襲かしめ改めて宗聖侯と稱せらる又魯國
 に命じて孔子の廟を修繕し外側に廣き家を造りて學者の居所
 にせらる此時文帝の詔に曰く
 昔し仲尼大聖の才を負ひ帝王の器を懷き衰周の末に當て而
 して受命の運なく魯衛の朝に在て沫泗の上に教化す時に王公
 遂に能く之を用ゆること莫し乃ち退ひて五代の禮を考へ素王
 の事を修め魯史に因りて而して春秋を制し太師に就きて而し
 て雅頌を正す千載之後其文を宗とし以て述作し其聖を仰ぎて
 以て謀咨せざるは莫し命世の大聖億載の師表と謂つべきなり
 天下の大亂に遭て百祀墮壞し舊居の廟毀れて而して修せず褒
 成の後絶へて而して繼ぐ莫く闕里講誦の聲を聞かず四時蒸嘗

の位を觀ず斯れ豈に所謂禮を崇め功に報ひ盛徳必ず百世に祀らるゝ者ならんや茲に議郎孔羨を以て宗聖侯と爲し邑百戸を以て孔子の祭を奉ぜしめ魯郡をして舊廟を修起し百戸の卒史を置き以て之を守衛せしめ又其外廣に屋宇を作り以て學者をして居らしめん、

と聖人の徳の後世に厚きこと其一斑を知るに足るべし魏の齊王正始二年帝自ら論語尙書禮記等を講ぜられ是迄孔子を祭るは皆其故郷なる闕里に於て行ひ來りしが此時始めて太學にて孔子を祀りたり後世釋奠と稱する禮は實に此時に起ることな

ん、晋の世を経て南北朝の時に至り北魏の獻文帝天安の初年に詔して郷學なるものを立てられ郡に博士二人助教二人學生六拾人を置かる是より郡縣の學始まりしと云ふ、孝文帝の太和十

六年に孔子の謚號を改めて文聖尼父と稱せらる、尋て田を賜ひ孔子の子孫を養ふの令を發せらる、其後北齊の世に孔子の釋奠は毎歲春秋二回之を行ひ毎月の朔日に祭酒を捧げ博士以下國子諸學生等を大學の講堂に集め以て孔子を拜するの禮を行はる此れ後世朔日行禮の始めなりと云ふ、孔子三十代の孫渠の時に北齊にて恭聖侯と改めたりしが北後周に至りて靜帝の大象二年に詔して孔子を追封して鄒國公と爲し子孫世々其爵を襲がしむ、かくて支那の國勢も次第に衰へ情の世終りて茲に唐の御代となりて支那全國を統一することとなりぬ、唐の太宗の貞觀元年に詔して孔氏の子孫は共に租税を免ぜらる、同じ十一年詔して孔子を尊びて宣父と稱せられ盛大なる儀式を以て釋奠を行はる、尋て釋奠の時に詩歌を用ゆるの令を定めらる、今當時

に詠せられたる詩歌の一二を示さんに

迎神凝安

大哉至聖。文教之宗。紀綱王化。丕變民風。常祀有秩。備物有容。神之
格思。是仰是崇。

迎神

大哉孔聖。道德尊崇。維持王化。斯民是宗。典祀有常。精純益隆。神其
來格。於昭聖容。
玄宗皇帝開元十三年。車駕魯。過孔子之宅。幸使。遣
はし太牢。捧供。墓に供せらる。同二十七年。詔して孔子を追諡
して文宣王。爲す。又顔回。公。爵を追贈し。閔子騫。冉伯牛。冉仲弓。
宰子我。端木子貢。冉子。有仲子路。言子游。卜子夏。の九人に侯爵を贈
り。曾參以下七十三人に伯爵を贈り給ふ。孔子を王に封じ其子弟

に榮爵を追贈せられたるは實に此時を始めす聖賢の榮譽死
して餘裕ありと謂ふべし。次で孔子三十五代の孫。瑗之を封して
文宣公。爲す。漢滅びて五代の初め。周の太祖。廣順二年。親しく曲
阜に往き孔子の祠に謁し。將に拜せん。とせられし時。左右の群
臣之を止めて曰ひけるは。孔子は固に一個の陪臣なり。ざるを天
子の尊きを以て親ら之を拜せらる。は過當にあらずや。と。周王
曰く。孔子は百世帝王の師。何ぞ敬意を表せざるあらんや。と。遂に
拜し。更に其墓に詣て。再拜し。詔して樵採を禁せられし。と云ふ。
宋の太祖。建隆年間。三度國子監に行幸ありて。文宣王に謁し。詔し
て一品の禮を用ひ。廟の門に戟十六本を立てらる。眞宗。皇帝。大中
祥符元年。曲阜縣に往き。文宣王の廟に謁し。嚴肅なる禮を以て
祭典を行ひ。更に近臣を遣はして孔子の父叔梁紇。並に其子弟の

靈を慰め孔子に加諡して玄聖文宣王の號を追贈せらる、同五年
 玄聖を改め更に至聖文宣王の號を贈らる、仁宗皇帝至和二年孔
 子四十六代の孫文宣公宗愿を改め封して衍聖公と爲す、徽宗皇
 帝崇寧元年詔して孔子の子孔鯉を追封して泗水候となし、其子
 孔汲を沂水候と爲し、文宣王の殿名を改めて大成帝、謁文宣王殿
 と謂ふ、大觀四年文宣王の廟門に二十四戟を増立す、其制王者に
 異ならず、此歳孔子の弟子公夏首、后處、公肩顔、祖等十人に侯爵を
 贈る、南宋の頃に至り、金人起りて中國を侵し、勢中々に鋭く、南宋
 の高宗皇帝建炎年間の初めに南に走るに及び、孔子四十八代の
 孫衍聖公端友も帝に従て南に往き、衢の地に居る、金人此に於て
 端友の弟端操權を以て衍聖公と爲し、魯の國に封ず、元の世祖皇
 帝至元十九年孔子五十三代の孫宋衍聖公洙爵を辭す、蓋し前

に端友宋の皇帝に従て南下したるを深く思ふの情に出でたる
 なり、武宗皇帝大德十一年に孔子に號を加へて大成と曰ふ
 其詔に曰く

蓋聞先孔子而聖者、非孔子無以明、後孔子而聖者、非孔子無以法、
 所謂祖述堯舜、憲章文武、儀範百王、師表萬世者也、朕纂承丕緒、敬
 仰休風、循治古之良規、舉追封之盛典、加號大成、至聖文宣王、遣使
 闕里、祀以太牢、於戲父子之親、君臣之義、永惟聖教之尊、天地之大
 日月之明、奚罄名言之妙、尙資神化、祚我皇元、翰林承旨闔復之辭
 也。

とあり、文宗皇帝至順元年孔子の父齊國公叔梁紇に加封して
 啓聖王と爲し、母魯國太夫人顔氏を啓聖王夫人、顔子と爲す、明の
 太祖嘉靖九年祀典を釐正し、大成至聖文宣王の舊號を改めて至

聖先師曰大成殿を改めて先師廟を爲し大成門を改めて廟
 門を爲し帝自ら太學に幸して釋奠を行はる斯くも此時に至り
 て孔子の諡號を改められたるは大學士張孚敬云へるもの
 孔子祀典を議するの疏文に依れるなりとぞ張孚敬は其上書に
 孔子の諡號の文宣王とあるは孔子に對して本意にあらざれ
 ば之を改むべきを論じて曰へるには抑も漢の平帝元年に初め
 て孔子を追諡して褒成宣尼公と稱せしより唐の玄宗皇帝の時
 に更に文宣王と追諡し爾來王號相變らず元に至りて大成至聖
 文宣王と稱す孔子は素より至聖の君子なり生きて位を得ざ
 りしを以て没して後天子と均しく南面の禮を以て之を尊び贈
 るに王號を以てするは至當の説なるに似たり然れども王は君
 の號なり孔子は人臣なり生きて王爵を得ざるに没して後之

を贈るは可ならんや昔し夫子嘗て言へるあり曰く必ずや名を
 正ふせんか又曰く名正しからざれば則ち言順はず今臣にして
 之を王とするは名に於て正しきか言に於て順なるか春秋の時
 列國に王を僭り稱する者あり麟經の筆削て而して之を黜く蓋
 し名は實の著はるゝなり其實なくして其名ある之を淫名と謂
 ふ夫子の生るゝや尺寸の土地を得ず然るに今天下の號を有す
 天に在るの靈其れ之を肯んぜんや夫れ徳あれば必ず位あるは
 理の常なり其徳ありて其位なきは此則ち夫子の不幸なり何ぞ
 實なきの稱を以て聖人の榮と爲すに足れりと謂はんや或は言
 はん夫子の道は王者の道なれば王者の號ある怪むに足らずと
 吁是れ思はざるの甚しき者なり書に曰く天下民を降し之が君
 と作し之が師と爲すと古へは治教の職分れず君は即ち師なり

二帝三王は君師の責を盡くすものなり夫子の如きは則ち君を
 得ずして而して師たるものなり無實の諡を以て聖人に加ふる
 は必ず聖人の意にあらざるなり孔夫子の萬世に尊崇せらるる
 所以の者道に在りて敢て爵位の名稱にあらざるなり願くは舊
 號を改めて聖賢の本意に適せしめん帝此に於てか文宣王の
 號を削りて至聖先師と稱することゝなせり次て張孚敬は孔夫
 子に關する章服歌舞音樂配享從祀等の事に就て其改正を述ふ
 ること縷々數千言に及びりごぞかくて明朝滅びて今の清の世
 となりしも孔夫子の子孫に對するの禮は少しも渝ることなく
 幾何もなく康熙乾隆ご云へる名高き太平の御世打ち續き清國
 文運の隆盛を來したれば聖人の威名は益々尊くなり皇帝は法
 律を制定して孔夫子の子孫は衍聖公として萬世不朽の世襲爵

たることを令せられたりされば至聖孔夫子の子孫は歴代榮へ
 て自ら其やからも増し今も猶幾千の子孫孔氏と稱して尊き安
 らけき月日を事多き支那の國中に送りけるごなん、

以上述べ來れる如くかくも孔夫子が支那歴代に尊重せらる
 る所以の者は何處に在るやご問はんに蓋し亦偶然にあらざる
 なり抑も教育なる者が古來より著しく重んぜらるるは恐く支
 那ほど盛なる國はあらざるべし而して孔夫子の説き給ひし所
 の者何ぞや一言にして評さば即ち支那の教育制度の根源ごも
 稱するを得べし二千有餘年を経たる今日猶教育は支那國中に
 盛に行はるるご雖も教師の學生に教ゆる處の者は敢て今日の
 科學にあらずして全く孔夫子の教を以て貫くご謂ふも不可な

きなり、科擧の試験の如き皆以て孔子以來の古文學に基かざるはなし、洵に古文學は支那歴代の教科書と謂ふべく、學者の才能智識を判定するは古文學に熟するに否に因る、されば支那の朝廷に事へる役人は總て之れ孔子の門徒と稱するを得ん、學生の校に登るや必ず先づ孔子の像を拜せるは支那全國中に到る處其習慣ありて學ぶ所の者は其教へなり、孔子が支那の朝の唯一の師表と仰がるに至りたる素因は蓋し彼が支那の黄金時代とも稱すべき唐虞三代の遺蹟を解釋説明して之を後世に傳へたるに彼の子弟等が熱心に彼を尊信したるにあるべし、彼は實に支那人中の支那人にして人間徳美の絶妙に達したる者こそせられるなり、

孔子が如何ばかり己の徳行且つは教に就て自ら信ぜしか

は蓋し孔子の威望を知るに足らん孔子の言に聖と仁とは則ち吾豈に敢てせんや唯聖と仁とに近かんとして厭はず人を誨へて倦まざるなりと又曰く文は吾猶ほ人の如し躬行の君子は吾未だ之を能くせざるなり、又曰く徳の修めざる學の講ぜざる義を聞て従ふ能はざる不善を改むる能はざる此四者は是れ吾が憂なり、又曰く予は生れながらにして學を知るものにあらず、唯古を好みて之を求むるに敏なるものなり、此等の言に依て孔子の自信を察するに深く自ら謙遜の意を表するに似たり、又彼が世間に唱道せんご期したる政道人道も決して彼自ら創作したるにあらずして古へよりの者を益々明らかにするのみなり、ごは彼が述へて而して作らず信して而して古を好むご言はれたるを見て知るべし、孔子は亂世に生れたれば古への道を

確信し之を以て當時の世を匡正せんことを期したるなり、然れども孔夫子は古への正道を後世に傳ふるの責任は天獨り予に命したりこの大抱負を懐きしは彼が曾て匡人に襲はれたる時の言に文王既に没す文は予の身の上に掛けり、天苦し斯文を喪ほさんとならば予此文に與ることを得ざりし筈なるに天未だ斯文を喪ほさざる以上は匡人如何して予を害するを得んやとあるに依て思ひ遣らる、畢竟孔夫子は堯舜禹以來廢れたる正道を挽回し君は皆堯舜の心を以て國に臨み民は皆堯舜の民の心を以て世に處するに至らしめんこの深き自信を有したるに外ならざるなり、

去りながら孔夫子の子弟等が夫子に對して尊敬の意を表せるは實に甚しきものあり、顔淵曾て歎して曰く之を仰げば彌々

高く之を鑽れば彌々堅く之を瞻るに前に在れば忽焉として後にありと孔夫子の道の窮り盡すことなきを歎賞し又曰く孔夫子の道洵に高妙なりとは云へ其人を教ゆるには循々然として善く人を誘め我を博むるに文を以てし我を約するに禮を以てせらる人を教ゆるの道洵に之に過ぎるなしと或時叔孫武叔と云へる人孔夫子を毀りしに子貢之に謂て曰く以て爲ることなかれ夫子は毀るべからざるなり、他人の賢者とも稱せらるゝ人々は恰も丘陵の如く之を踰へんことせば出來ざることもあらざるべし去りながら孔夫子は恰も天にある月日と均しく到底踰ゆること出來ざるなり、然るを孔夫子を毀て之を絶たんとするは抑も自分の分量を知らざるものと謂ふべし、又陳子禽と云へる人子貢に問ひたることありしに子貢答へて曰く孔夫子

の及ぶべからざるは猶ほ天の梯子もて昇るべからざるが如し
夫子若し邦家を得ば庶民を教へ導き之を安んじ之を和せしむ
るを以て民の夫子に心服するに至るや知るべし其生けるや民
の尊親を受け其死するや民の之を哀むこと父母の喪に於ける
が如くならん如何にして夫子に及ぶこと出来んや孟子曾て
公孫丑と問答せるあり其時公孫丑問ふて曰く伯夷伊尹は如
何なる人物なるぞ孟子答へて曰く道を同ふせず其君に非れば
事へず其民に非れば使はず治まれば則ち進み亂るれば則ち退
くは伯夷なり何れに事ふことして君に非らざる何れを使ふこと
て民に非らざる治まるも亦進み亂るも亦進むは伊尹なり以
て仕ふべければ則ち仕へ以て止むべければ則ち止み以て久し
かるべければ則ち久しく以て速かなるべければ則ち速かなる

は孔子なり皆古への聖人なり吾未だ行ふことある能はず乃ち
願ふ所は孔子を學ばんと公孫丑更に曰く然らば伯夷伊尹と孔
子とは相均しきや孟子曰く否生民ありて以來未だ孔子あらざ
るなりと又宰我の言に予を以て夫子を觀れば堯舜に優ること
遠しと子貢曰く其禮を見て其政を知り其樂を聞て其徳を知る
百世の後より百世の王を差等するに之を能く違ふことなし生
民より以來未だ夫子あらざるなり有若曰く豈惟た民のみなら
んや麒麟の走獸に於ける鳳凰の飛鳥に於ける太山の丘壘に於
ける河海の行潦に於ける類ひなり聖人の民に於ける亦類ひな
り其類に出て其萃まれるに抜く生民より以來未だ孔子より
盛なるものあらざるなりと以上叙述する所に依りても孔夫子
の子弟が彼を人間の美德を備へる最上の至聖と仰げるを知る

に足らん其流れの全帝國に亘れる支那國なれば孔夫子の威望の古今無比なるは怪むに足らざるなり、

孔夫子が支那の文學上に於ける効績は實に特筆すべきものなり抑も孔子の生るゝ以前既に支那には燦然たる文學の存せるありしも千有餘年打續きたる封建制度の弊害の爲めに漸く消滅の姿を現はし孔夫子の出でたる頃は世の中の紊亂最も甚しきと共に從來の文學も殆ど廢れて跡を後世に滅せん有様なりき孔夫子熟々當時の急を救はんと思ひ之を爲すには從來の歴史制度禮樂等を復興し益々之を明らかならしむるに若かずとて亂れたる世の中に獨り屹然として古書を輯蒐し自ら其解釋を下して子弟を薰陶し以て國內を風化せんことを務めたり、

孔夫子をして後世至聖と仰がしむるに至りしは一は以て時勢の然らしめたる者と謂ふべし支那歴代の旺盛なる文學の淵源たる孔子以前の古學が孔夫子の力に因て幸に泯滅せざりしを思はゞ孔夫子が支那文學に於ける効績豈に特書せずして可ならんや今孔子以前の書に就て畧述せんに孔子以前の書は世に五經と唱へ又は六經と稱す五經とは詩書禮記易春秋を云ふ之に樂經を加へて六經と云ひ或は樂經の代りに周禮を加へて六經と云ふもあり、

(一)詩は其昔し三千篇ほぞありしを孔子之を取捨して音律に叶ひ世人の摸範となるべきもの文を蒐めて三百十一篇とはしたり世に通常詩三百篇と稱す此に風雅頌の三種あり風は國風にして諸國の風俗習慣を心に感じて歌ひたるものなり其國々

は周南召南邶鄘衛王鄭齊魏唐秦陳檜曹豳の十五國なり雅は正の意にして政の事を歌ひたるものなり政は自らを正ふして後人をも正ふするものなれば正は云ふなり政に大小ある如く詩にも大雅小雅の二つあり周の朝廷の公卿大夫の人達が此詩を作りて當時の政を諷評する爲めに用ひたり頌は人の徳を詩に歌て譽あるを云ふ之に周頌魯頌商頌の三種あり周頌は周文王武王の徳を賞したるものにて多くは周公の作に拘る魯頌は周公の治めたる魯國の詩なれば聖人の教後世まで傳はり孔子故らに之を集めたるものなり商頌は殷の世の詩なり亦詩に六義あり風雅頌賦比興是なり風は國風なり雅は小雅大雅なり頌は周頌魯頌商頌なり此三者を三經と唱へ賦比興を三緯と云ふ恰も織物に縦横あるが如く詩にも經緯あるなり賦はありの

まゝを述べ比は日月草木鳥獸に喩へて詠し興は四季の時節に依て思を述べものなり此三者は風雅頌の孰れにも備はり又一首の中に三者共に含むもあるなり詩を通常周詩と呼ふは周の世の詩なるを以てなり又之を詩經と唱ふる故は聖人の傳へたる書なるに因るなり周詩三百篇あり之を一言にして評さば孔子の言はれたる如く思無邪の三字を以て對へんのみ則ち善事を見聞きて詩を作りて譽むれば作る人も聞く人も共に善心を起すに至るべく又悪事を見聞きて之を詩にて誡め謗る時は作る人も聞く人も共に悪心を恐るゝに至るべく詩の大要は全く人倫の教に適合するものなるの謂ひなり

(二)書 此は書きしるすの謂にして虞夏商周四代の政を記せるを以て書とは名つけしなり詳しく言へば虞舜の時の書を虞

書云ひ夏の世の書を夏書と云ひ商の世の書を商書と名け周の世の書を周書と名く孔子の書を削り定めらるゝ時百篇ほゞありしが秦の始皇が天下の書籍を焼き盡さんこしたる時孔子の子孫之を深山又は壁の中に隠し置きたれば漸く滅びざるを得漢の世に至て古書を尋ね蒐める時に壁の中より取り出し竹を編みて古文もて記しあれば知る人極めて稀なりしと云ふ其中讀み得たる者を集めて虞書五篇夏書四篇商書十七篇周書三十二篇合せて五十八篇を得たり世に之を尙書と稱するは上古の書なるを以てなり虞書の第一に堯の徳と政を記し第二に舜の徳と政を記す堯舜共に萬世の聖人なれば之等を堯典舜典と名けて後人の則るべき法とせり夏書の第一に禹貢の篇あり之は夏の禹王が洪水を治め土地山川の差別を明にし諸侯を制し

遠く夷狄までも政を施したるを述ぶ商書第一に湯誓篇あり之は夏の桀王無道にして天下の人民皆塗炭に苦みければ殷の湯王義兵を起し桀を討たんこて諸侯を集めて誓て桀が天命に違へる罪を言ひ述べたるなり次に大甲の篇あり太甲は殷の湯王の孫なるが甚だ不義なりければ湯王の大臣伊尹之を諫め三年を経て太甲其諫に従ひたれば立てゝ天子とし奉れる事を記せり周書第一泰誓篇は周の武王殷の紂王を討たんこて孟津と云ふ所に諸侯を集め紂王の惡逆無道を誓ひたる有様を記し洪範篇は水火木金土の五行の理をあかし天地陰陽を人の身に備へたる事を云ひ又貌言視聽思の五法食貨祀司空司徒司寇賓師の八政を記し夏の禹王より傳へ來りて武王の手に入りたるものこそ此他金縢大誥康誥以下十餘篇あり皆周公旦攝政の時の政

を記せるものなり、此の如く尙書は概言すれば政事の記録なる
 が一方には堯舜禹湯文武周公の如き大聖の事蹟を擧げ他方に
 は殷の紂王夏の桀王の如き暴逆の君の事蹟を叙し天下を治む
 る者の須らく鑑みるべき教を傳へたるものと謂ふべし、
 (三)禮記、此も孔子の集め給ひしものにて四十九篇あり、古
 への禮法を記せるものなり、秦の始皇以來亂れて其正鵠を得ざ
 るに至り前漢の戴德と云へる人の傳へたるを大戴禮と名づけ
 戴聖と云へる人の傳へたるを小戴禮と名づく此小戴禮こそ即
 ち今日に残れる禮記にして曲禮上下篇及び内則小儀合せて四
 篇あり、大体言語飲食衣服の法並に人の子たる者人の妻たる者
 の行跡老人を養へる法までも説き書せり、禮記に經禮三百曲禮
 三千と云ふことあり、經禮は元服、聾、跛、婦、喪、葬の次第、祭、次

の儀式、軍旅の法、主人賓客の時宜、其他大なる祝義等の類數へた
 らば三百もあるべし、曲禮は委曲の禮にて細かなる事を云ふ
 なり、起居、掃除、給事、配膳、衣服、飲食、問答、物語の類、詳しく調ふれば
 其數三千にも登らん、三百三千と云へるは數の多きを概言した
 るものなり、位にて言へば天子の禮あり、后妃の禮あり、太子の禮
 あり、諸侯の禮あり、世子の禮あり、夫人の禮あり、卿大夫の禮あり、
 士庶人の禮あり、又人倫に依りて言はゞ君臣の禮あり、父子の禮
 あり、夫婦の禮あり、舅姑の禮あり、長幼の禮あり、朋友の禮あり、師
 弟の禮あり、上下貴賤の別、紊れず人倫の道正しく行はれなば王
 道の成就すべきを明らかにしたるなり、
 (四)周禮、是は周公旦と云へる君攝政六年の間に作れる者に
 て、天地春夏秋冬にかたざりて官を立てたり、故に六典とも稱す、

(一)天官を家宰と云ふ天子を輔け百官を総べ諸政を執行する役目にして今日の内閣總理大臣なり(二)地官を大司徒と云ふ萬民を教へ百姓を親み農を勸め租税を取り立て國家の富強を謀る役目にて内務大臣とも稱すべきものなり(三)春官を宗伯と云ふ天神地祇を掌り祭祀の事禮儀の事を司る昔は故らに祭祀を重んじたるを以て此官あり我國昔時の神祇官と相當す今は之に應ずる重職なし(四)夏官を大司馬と云ふ此は天下兵馬の權を握り軍旅の事皆其司る所にして今の陸軍大臣に均しかるべし(五)秋官を大司寇と云ふ訴訟を聞き公事を裁斷し盜賊を誡め獄囚を司る今の司法大臣なり(六)冬官を大司空と云ふ天下の土地と人民を是はかり比べて無益の空地なき様にするを司る今の大藏大臣に類せん是も天地陰陽の萬物を主宰するが如く國に

民を治めるの長官備はりて始めて天下無爲にして治まるの意を述べたるなり、

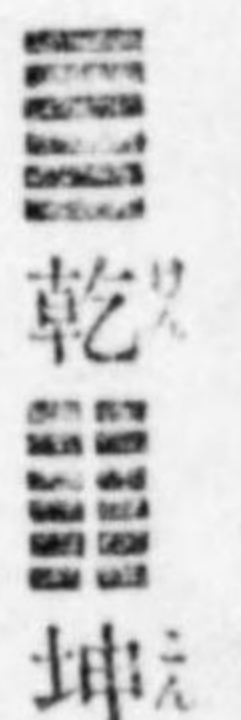
(五)儀禮 是も周公旦攝政の時に撰びたる者にて十七篇あり(二)士冠禮は男子年二十にして元服する儀式を記す(三)士婚禮は士の嫁娶の儀式を記す(四)士相見禮は士と士と初對面の儀式を記す(五)鄉飲酒禮は諸侯の大夫三年に一度つゝ賢人才能ある者を撰び上げて君に勸む此時禮義を以て迎へ賓客として酒を飲む時の儀式を記す(六)燕禮は春秋二期禮義を以て人を集め學校にて弓を射ふ儀式を記す(七)大射は諸侯祭禮を行はんとする時に群臣を集めて弓を射らしめて其禮儀を見るを云ふ(八)聘禮は諸侯の使者隣國へ往

く時の儀式を書せり(九)公食太夫禮は君より太夫を召して飲食を賜ふ儀式なり(十)覲禮は諸侯の秋天子に見ゆる禮を記す(十二)喪服は喪の禮を記す(十二)士喪禮は士たるもの其父母死してよ
り除服するまでの禮なり(十三)既夕は士喪禮の下篇にして父母葬らざる先二日夕部に哭する時と葬るとの間の次第を記す(十四)士虞禮は士既に其父母を葬て魂を迎へ歸て日中に殯宮に祭りて父母の靈を安んずる禮なり(十五)特牲饋食禮は士其祖禰を祭る禮なり(十六)少牢饋食禮は諸侯の卿太夫其祖禰を廟に祭る禮なり(十七)有司徹は少牢饋食禮の下篇にて太夫既に祖禰を祭りて其神を堂に導き或は室中に拜するの儀式なり以上の周禮儀禮記の三つを世に三禮と號す

(六)樂經、是は黃帝堯舜禹湯文王武王に至るまで代々の樂を

記し宮商角徵羽の五音を六律六呂に合せ之を調子付けるに金石絲竹匏土革木の八音を以てす樂の音能く調ふ時は鬼神も感ずるに至る去れば人倫に於て風を易へ俗を改むるには洵に樂に若くものなし故に禮と相對して禮樂と稱し孔夫子の正したまへるものなりしが惜ひ哉秦の始皇の時に紛失して唯だ周禮記左傳等に散見するのみとはなれり

(七)周易、易に三説あり、一は易簡と云ひて天地の道は自然の理にして安らかに何の造作もなきの意を示すとし、一は寒暑日月の改まり陰陽五行の變化する如く變易の意なりとし、一は天地の道は常住にして古今變らざる所謂不易の義なりとするの三説あり、此三理を説き教へる書なるを以て易とは名けたるなり、易とは元と周の文王と周公との用ひ給ひし辭にして、周易と

は云ふなり、易の卦は昔し伏羲の作りたるものなりと稱し一を陽とし一を陰とす  坤の類是なり孔子甚だ易の理を好ませ給ひて易傳を作られたるを十翼と名く、易に交易變易の二種あり、天は上、地は下なれども、天氣降り、地氣騰る、水は火に對し、山は澤に對し、陰と陽と相交るの類是れ交易なり、春秋の推し移り、寒暑相替はり、一氣より物を生じ生ずる物又滅す、吉凶禍福進退去就の類は皆是れ變易なり、されば易は天地陰陽を明し、人事の吉凶を示し、萬物の理と象と數とを明せり、支那歷朝に限らず我邦にも昔しより治く行はるゝ占ひの術は全く此易の存するに基くものなり、

(八) 春秋、孔夫子が其一生涯の中最も骨を折りたるは魯の國の史記なり、其書きふりは年の下に春夏秋冬の時を記し、其次に

月を記す、是れ當時史官の筆とる法と見ゆ、春に夏を兼ね、秋に冬を兼ねて、春秋とは名づけたるなり、孔夫子の正し削られたる經書多かれご自ら筆をこりて書かれたるは獨り此春秋あるのみ、そも魯の國は周公旦の封ぜられたる國にして、且は周の都に居て、周の天子を輔佐し、其子の伯禽と云へるを魯國の主としたり、伯禽十三代の孫を隱公とす、隱公即位の元年は周の平王四十九年にあたり、隱公の元年より哀公十四年まで二百四十二年間の事蹟を春秋に記せり、孔夫子の春秋を書き給ひし主意は全く勸善懲惡を本とし、善人を勸めて、惡人を懲すに出でたるものなり、故に王公貴人と雖も心の惡しきは之を謗り、庶民と雖も善なるは之を賞嘉せり、君臣父子兄弟夫婦の間、苟も人倫の教に悖る所あれば、一言の假借する所なくして、之を筆誅すされば、後世君

に背き父母に不孝なるの亂臣賊子の輩皆是を見て大に怖るゝ
 に至りしこなん、後世春秋を註したる者に三種あり、魯國の史官
 左丘明が傳へたるを左傳と云ひ、齊國の人公羊高が傳へたるを
 公羊傳と云ひ、魯國の人穀梁赤が傳へたるを穀梁傳と云ふ之を
 春秋三傳と稱し、皆世に行はる、春秋は實に支那歴代の史家が採
 て以て記録の模範となすものなり、
 以上は是れ皆孔子以前の書にして、夫子の筆削蒐輯に係れる
 ものなり、此他孔子に直接間接に關せるは所謂四書にして、大
 學、論語、中庸、孟子、是なり、大學は孔子の遺書なりと稱し、身を修め
 家を齊へ國を治むるの法則を論じ、論語は孔子と其子弟との問
 答を記し、中庸は孔子の孫子思子と云へる人道學の其傳を失ふ
 を憂ひて作りたるものにして、經に允に其中を執れとあるを

原理として人性の理を説き、孟子は天下爭亂の世に出で、孔夫
 子の學説を繼ぎ之を續釋して孟子七篇を作りたる者にして一
 言せば仁義王道を辨論したるものなり、
 扱て孔子は如何なる教を説き給ひしかを察するに今日の
 所謂科學者にもあらざれば亦泰西諸國の哲學者にも類せずさ
 らば、こて釋迦基督の如く宗教を説き給ひしかと云ふに左るこ
 こにもあらず、彼は事物の起源終極を究めたるなく、又人生の起
 原目的をも尋ねたる跡なし、彼の生涯説き給ひし教は之を概言
 せば人生の實踐躬行すべきの道を説き、修身齊家の事より延ひ
 て治國平天下に及べるを論せしものなり、前にも云へる如く孔
 夫子の頃は亂世の最中なれば、其紊れたる世の中を正しき昔し
 に挽回し天下平かなるに至らしめ、
 是は彼れ畢生の目的にして

其此に至るこの恰も掌を返すが如くに容易ならしめんことを常に慮りしなり、されば彼が最も力を注ぎ給ひし實踐躬行の道も畢竟天下を治むるの方策に過ぎざるなり、今日より之を見れば純然たる一個の政治家に外ならず、只政治家なる者は往々漠大の空想を抱くのみにて實際に適合せざる者多けれど、孔子は敢て然らず、極めて小分子なる一人一個の品性を正ふして其基礎を固め、以て自然に國家の太平ならんこの順序方策を述べたるものにして、是れ彼が世俗の政治家と其類を異にして萬世に其光を放つ所以なり、

夫子の考へに依れば、一体人民は他に司配せらるべき自然の傾きを具ふるものなるを以て、只其方法の正しからんことを要するのみ故に、若し民を司配する君にして、眞に其人を得ば、政の

擧がること恰も草木の萌へ出づるが如くなるべし、上に立て下を治むるの君、其人を得ることの必要なるは支那のみに限らず、孰れの國にも缺くべからざる眞理にして、古來暴君の御世に國治まりしこの例は、洋の東西に之れありしを聞かず、まして支那の國民は、平和秩序を愛し、上に司配せらるゝ特性の他國に秀てたる者なれば、明君の上に立つこと必要なるは、猶更の事なり、抑も人間社會には、君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友の五つの關係自然に存在するものにて、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、此五つの者が具さに行き、亘らば是れ即ち天下太平を致すの基なれば、一國の君たる人は、須らく此五つの者が完全に行はれんことを心掛けざるべからず、事の此有様に達せんには、素より人々の徳を養成すること必要なるが先、上に立つ所の君

なる者が己を正ふし身を修めて以て其模範を下に示すこと第一の急務なり、君にして己を正ふし身を修めて以て天下に臨まば上の好む所は下の倣ふ所上よりも甚しき者なれば庶民自ら己を正ふし身を修むるに至るべし、而して君たる者政を施すに仁の心を以てせば國の治まること疑ひなかるべし、天子より庶民に至るまで身を修むることは國家治平の根本なるが其身を修むるに最も缺くべからざる云はば修身の石礎とも稱すべきは是れ則ち孝弟の道なりとす、孝とは苟も人たる者は父母の心を心として人たるの道を父母に盡すことを云ひ弟とは年若き者が年長じたる者に對して能く其道を盡すを云ふ、此二つの者は畢竟人の人たる所以の根本にして君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信も自ら之より生ずるに至るべく、國に君た

る人が政を施すに第一の要義たる仁の心も全く此孝弟の道より生ずるものなり、されば孔夫子の言に父在せば其志を觀、父没すれば其行を觀る三年父の道を改むるなきを孝と謂ふべし、ことあり又曰く父母に事ふるに始終禮を一にし生ける時も葬る時も祭る時も一に皆禮を以てするも亦孝の道なり、事あれば其勞を自ら執りて敢て之を父兄に委ねず、又飲食は必ず先づ父兄に供するは勿論のこと、父兄に事へて常に和氣を帯び愉色を現はすこと、是れ父に孝、長に弟たるの務めとなすに足れり、ごあり、扱て又仁なる者は人間最上の美德にして己の心を制し、視ること聽くこと言ふこと動くこと皆以て禮儀に違ふことこのなきより起るものなり、人苟も仁の心を体せば必ず恭、寛、信、敏、惠の五徳を一身に備ふるに至るべく、恭なれば則ち侮らず、寛なれば則ち衆

を得、信なれば則ち人之を任じ、敏なれば則ち功あり、惠なれば則ち以て人を使ふに足る、人に君たるもの能く此五つの者を天下に行ふことを得ば則ち國の治まること自然の理なるべし、然れども人生れながらにして斯る美德を備ふるもの頗る稀れなり、固より人は天自然に仁義禮智の性を賦與せられ居る者には相違なければども其氣質の稟け方均しからずして天自然の性を完ふする能はざるもの極めて多し、此に於てか始めて教育の必要起るなり、故に人生れて八歳に至れば王公より士庶人に至るまで皆小學に入れ之に教ゆるに灑掃應對進退の節、禮樂射御書數の文を以てし其十五歳に達するや天子の元子より公卿大夫元士の適子に至るまで庶民の俊秀なる者と共に之を大學に入れ之に教ゆるに理を窮め心を正ふし己を修め人を治むるの道

を以てするなり、此人を治むるの道を講ずる所謂大學の三大綱領と稱する者あり、即ち一は明德を明にし一は民を親み一は至善に止ること、是なり、明德とは人の天に得る所の者にて極めて靈妙の性を備へ衆理を解して萬事に應ずるの力あるものなれば往々人欲の爲めに蔽はれて時に昏きことあり、故に學者將さに之を發して其本體の明を益々明らかにして初めに復らしむること、これを務めること第一の急務なり、斯くて自ら其明德を明らかにし得たれば之を人に及ぼして其舊染の垢を去らしむるを必要とす之れを民を新たにすることを謂ひしものにて此兩者共至善の地に到らば其處に止て決して他に遷らざる様に心掛けざるべからず、是れ大學の教への最も重大なる原則なり、人に君たる者能く萬物の理を究めて萬事に精通し意を誠にして心を正

ふせば其身自ら修まるべく身修らば家自ら整ひ家整へば國自
ら治まる國治つて而して後天下の人をして皆其明德を明かに
せしむるを得るに至るべし天下の人皆其明德を明かにするに
至らば天下の太平ならんこと期せずして至らん以上叙し來れ
る所の者は單に是れ孔夫子の説き給ひし要領なれど之を見て
も其教の實踐躬行に始まりて修身齊家治國平天下に終るにあ
ることを知るに足るべし、

孔夫子の學説が支那全國に洽く行き亘れるに至りしは前に
述べたる夫子の師弟が孔夫子の死後諸國に仕官して之を廣め
たるの力に因る殊に顔子曾子の兩人は其教の傳を後世に遺し
たる爲めに益々世に明らかなるに至れり其後世の中やうやく

亂れて老子の道經をむねこせる莊子列子の如き異端のごもが
ら諸處に起り聖人の教もその爲めにまさきに滅びんとする有様
なりしが偶々孔夫子の孫にあたる子思子と云へる人深く之を
心配して四書の一なる中庸を著して聖人の教を永く世に傳ふ
ることを得たり次で子思子の門弟に孟軻なる人出でて孟軻
篇を著はして益々人道を明らかにしたり孔夫子の教へは孟軻
に依て後世に傳はるものと謂ふべきなりされば古人の言にも
聖人の教へは堯より之を舜につたへ舜は之を禹につたへ禹は
之を湯につたへ湯は之を文王武王周公の三人につたへ文王武
王周公の三人より之を孔子につたへ孔子は之を孟軻につたへ
たるが孟軻死して後之を傳ふべきものなきに至れりごあり又
曰く孔夫子の道は洵に大きくして博く門弟子ごもたりごも其道

をあまねく見透して知りつくすことは出来ざりし故た、孔夫子に就て出来る丈其道に近くこそを務めたるものなり、其後門弟子の人達が諸國にちりわかれて各の國にて孔夫子の教を子弟に授くる様になりて源の同じき孔夫子の教も末は種々様々にわかれてまことの道を持ちこたへるもの餘程すくなくなりゆきけるが孟軻は子思子より直接に其教を受けたるなれば孟軻のつたへたる道こそ純粹の教へなれ、故に聖人の道を見んことを望まば必ず孟軻によらざるべからずとあり、
顔子、曾子、子思子、孟軻の四人はかくのごとく聖人の教を傳へるにつひて其功洵によるづ世までもひろくかゝやかすべきものなり、されば後の世に至りて此四人は四配と唱へて聖人に最も近きものとなし、顔子には復聖、曾子には宗聖、子思子には述聖、

孟子には亞聖といへる尊稱をおくり、その上に孔夫子に王の爵を贈りしと同一く此四人に孰れも公爵の位を贈りたり、また孔夫子の門弟中にて顔淵はもとより閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏の人々は特に著しき才能を抱きしを以て孔夫子も是等をほめて言はれたる言葉に德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓の四人最も長し、言語には宰我、子貢の二人、政事には冉有、季路の二人、文學には子游、子夏の二人なりとあり、是等の人は共に先賢と唱へて同じく公爵の位を贈られたり、顔淵を除きて残る九人のものに子張を加へて十哲と稱す、其他の門弟子は皆先賢もしくは先儒と唱へていづれもそれらの爵位を贈られたり、今四配十哲の名稱並に爵位を記せば左の如し、

四配

- (一)復聖顏子 (封衰國復聖公)
- (二)宗聖曾子 (封郕國宗聖公)
- (三)述聖子思子 (封沂國述聖公)
- (四)亞聖孟子 (封鄒國亞聖公)

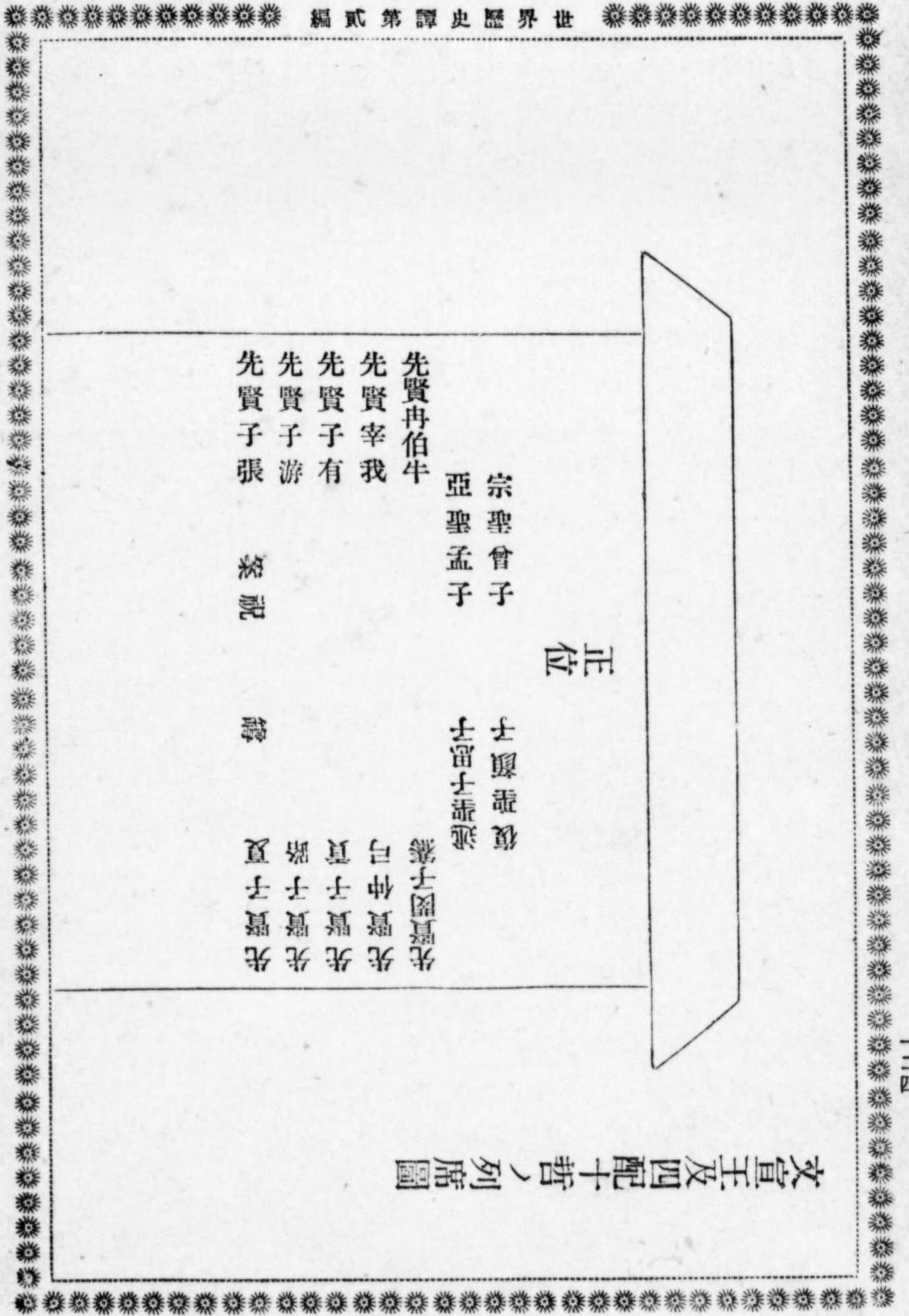
十 哲

- (一)先賢閔子騫 (封費公)
- (二)先賢仲子 (封薛公)
- (三)先賢子貢 (封黎公)
- (四)先賢季路 (封魏公)
- (五)先賢子夏 (封魏公)
- (六)先賢冉伯牛 (封郕公)
- (七)先賢宰我 (封齊公)

- (八)先賢子有 (封徐公)
- (九)先賢子游 (封吳公)
- (十)先賢子張 (封陳公)

以上の人々は孔子の門弟又は其教を傳へたる中の最もすぐれたるものなり、支那の國廣しといへども到る所學校の設けあらざるはなし苟にも學校の設けある所なれば上は北京の帝都を始め下は邊卑の田舎に至るまで必ず文廟と唱へる一つの會堂の建つあり、これ支那人がごこまでも孔子の恩澤を忘るゝことのないため、年に二回春秋の吉日を擇びて孔子及び其門弟子を祭る場所なり、これを見ても孔子及び其門弟子が如何ばかり支那人に其威望を及ぼし居るやを推しはかるに足るべし、かく聖人たる孔子を祭るの式を釋典とは稱するなり、

文宣王及四配十哲ノ列席圖



先賢先儒

先賢先儒

御拜位 贊引官

諸王 諸王

釋典の禮は支那の禮式の中にも天皇の祭りに次ぐ程の大禮なれば此時には各州の役人共の參列するは更なり都にては歴代の天子親しく文廟に行幸ありて祭典を行はるゝこと常の事たり去れば其儀式のおごそかにして頗る複雑の者なることは言ふに及ばず古禮に拘泥する支那人のわざなれば無理ならぬことごもなり今予は此儀式の一例を左に簡略に述ぶべし、先づ此儀式を司る役人方の職掌は齋戒省牲正祭陳設の三つにして齋戒は祭りの前日祭場を清めることにて省牲は同じく前日に牛山羊豕兔等を靈前に供するを云ふかくて其日になりて正壇と云ひて孔夫子の靈前に正しき供物をなすを正祭陳設と云ふ其時に四配十哲先賢先儒の人々も共に孔夫子の左右にならべて一所に相當の供物を奉るなりさて其供物は概ね

次の如し、

正壇

犢一 羊一 豕一

登一 籩豆各十

鉶二 簠簋各二 帛一 白色

酒尊三 爵三

筐一 禮の東南に供ふ

祝文案 禮の西に設く

四配位

每位

羊一 豕一 登一

鉶二 籩豆各十 簠簋各一

爵三 帛一 筐一

十哲

東五壇

豕一

帛一

篋一

爵三

每位

鉶一

籩豆各四

簠簋各一

酒盞一

西五壇

陳設東五壇に同じ

東廡

共豕一

帛一

篋一

爵三

西廡

每壇

籩豆各四

簠簋各一

酒盞四

陳設並びに東廡に同じ

さて祭りの模様は先づ典儀の役人樂を唱へ舞生位に就く、執事官各其事を司り分献官陪祭官各位に就く、賛引と云へる役人献官を引ひて盥洗所に至る、賛盥洗の位に詣り笏を搯りて出す、引拜位に至り賛位に就く、典儀迎神を唱へ奏樂す、樂止で賛四拜す、典儀奠帛を唱へ初献の禮を行ふ奏樂、執事官帛爵を捧けて神位の前に詣り賛引賛大成至聖文宣王の神位の前に詣り笏を取り執事帛を以て進む奠訖はりて執事爵を以て進む賛引賛爵を献じ、笏を出して讀祝の位に詣り跪く、讀祝、讀祝官祝を取りて

献官の左に跪く、讀訖りて俯伏して平身を興し、賛、兗國復聖公の
 神位前に詣り、笏を取り、爵を献じ、笏を出して、鄒國宗聖公の神位
 前に詣り、儀前に同じ次で、沂國宗聖公及び鄒國亞聖公の神位前
 に詣り、賛位に復し、樂止む、典儀亞献の禮を唱へ、行ふ、奏樂、執事、爵
 を以て、神位前に献じ、樂止む、典儀終献の禮を唱へ、行ふ、奏樂、儀亞
 献と同じく、後樂止む、典儀飲福を唱へ、胙を受く、賛、飲福の位に詣
 て、跪く、笏を取り、執事、爵を以て進む、賛、福酒を飲む、執事、胙を以て
 進む、賛、胙を受け、笏を出し、俯伏して平身を興し、位に復す、賛、二拜
 す、典儀、賛、饌を徹す、奏樂、執事、各神位前に詣り、饌を徹す、樂止む、典
 儀、送神を唱ふ、奏樂、賛、引、賛、四拜す、典儀、讀を唱ふれば、祝官、祝を捧
 げ、掌祭官、帛饌を捧げ、各瘞位に詣り、典儀、望瘞を唱へ、奏樂、賛、引、賛
 望瘞位に詣り、樂止み、賛、禮畢る、此祭りに讀む祝文は、

維れ某の年、歲次某甲子、某月某日、皇帝具官某を遣はし、祭りを
 大成至聖文宣王に致す、惟みるに、王、德、天地に配し、道、古今に冠
 たり、六經を刪述し、憲を萬世に垂る、謹て牲帛禮を以てし、粢、盛
 の庶品を齊へ、祇みて、舊章を奉り、式、陳して、明らかに薦め、衰國
 復聖公、鄒國宗聖公、沂國述聖公、鄒國亞聖公を以て配す、尙くは
 享けよ、

ごあり、祭りの嚴肅なる様の明らかに現れて、聖人の徳の高き
 こと、徐ろに思ひ遣らるべし、

孔夫子の徳はたゞに支那の國に高きのみならず、建國の其昔
 しより、忠孝仁義を本として、二千有餘年の發達を遂げたる我が
 大日本帝國に於ても、學問の元祖として、ふかく尊崇せられ、近く
 徳川の幕府時代には、江戸の大學を始め、諸藩の郷學に至るまで

皆聖堂ご唱へるものありて孔夫子の祭りを春秋の二期に行ふ
 こと支那にかはらず蓋し支那の制度を採り用ひて我國にても
 同しく釋奠ごは稱したるなりされば其儀式の模様なごも前に
 述べたる支那の儀式ごほんご相同しきものなり只少しく異
 なる所あり即ち釋奠執行の月の前月三十日に御儒役を始め御
 儒者教授方勤番組頭以下の役々まで皆惣出寄合ふを例ごす之
 を釋奠大調ご唱ふ又例へば二月の十四日が釋奠の日ご定まら
 ば其月の九日より十五日まで諸稽古を休み十一日に大掃除を
 爲し十三日に將軍の御名代參見するなりさて役員には祝執尊
 掌事賛唱監祀執饌其他賛禮賛引なご恰も支那に於ける役員に
 類せり又祭りには初獻亞獻終獻の三禮あるごごもかはりなく
 祝文の如きも能く似たり則ち左の如し、

維れ某年歲次月朔日子征夷大將軍謹て官位姓名を遣はし敢
 へて文宣王に昭告す惟みるに王は固より天の縦に降誕する
 所生きて經緯禮樂を知り文教を闡揚し餘烈風を千載に遺し
 仰ひて未學の者をして仁に依りて藝に遊ばしむ謹んで以て
 幣犧を制し粢盛の庶品を齊へ祇て舊章を奉り式陳して明ら
 かに薦め顔子等を以て配す尙くは饗けよ、
 ごあり聖堂ごし云へば直に聖人の教へを講し忠孝仁義の心
 を養成する場所ご思ひ定めたるものなれば過ぎし昔しの人達
 が心を磨き膽を練るには聖堂の力洵に多しごいふもひがごご
 にはあらざるなり、
 予は今爰に孔夫子の言はれたる言葉より今日少年諸氏の急
 務ごして實行せられんために左の五則を擧げん、

(一)巧言令色鮮矣仁、人間の最も美德とする者は仁の心なり其仁なる者は言葉を巧みにして人をごまかし又は外貌を飾る様なことこの少き丈仁に近づくものぞ知るべし、

(二)主忠信無友不如已者、過則勿憚改、人は忠信の二字を常に心掛けざれば何事をしても其詮なし又自分より劣れる者は友として甲斐なければ成るべく自分より優等の人と交りを結ぶべし、又一度過ちを爲さば決して之を改むることを遠慮すべからず、悪しき事は男らしく改むべし、

(三)見義不爲無勇也、自分に義理のこゝと知りながらそれを行はざる者は男子たるの勇氣なく畢竟婦女子に異ならず、

(四)士志於道而恥惡衣惡食者未足與議也、苟にも士と生れたる者が學問の道に志して居ながら衣食の悪しきを恥しがる位に

ては到底他日の大成は覺束なし、須らく衣食の善悪をかまはずして熱心に學問に志すべし、

(五)君子欲訥於言而敏於行、少年諸氏にして他日立派なる人物にたらんご欲せば言葉は訥であつても身に行ふ仕事は敏活にせざるべからず、

以上叙述するところに依り支那の大聖孔夫子が如何なる生活を送り給ひしか其子孫の歴代尊崇せらるゝ有様、又其説き給ひし教の要點其教の今日まで傳はれるに與て力ありし子弟のこゝもならびに今日まで孔夫子を祭れる釋奠の模様なごあらまし了解するここを得べし、孔夫子は今日支那にて儒學と唱ふる正しき學問の元祖なり支那の政治、支那の風教の泰斗なり、

彼は蘊奥の眞理を搜索せんごしたる哲學者にあらず、また國民の信仰を收攬せんごするの宗教家にもあらず、豈にまた事物の原理を探究する所謂科學者なるものならんや、彼はたゞ時勢を慮る所ありて堯舜以來の治まり平かなる御世の由をたづね、つまり天下太平の基は上に君たる者も下に臣たる者ご共に人倫の道を實踐躬行するに若かざることを斷定したるに過ぎざるなり、萬物の靈長たる人間が此世に生存するには人倫の道が其基礎たるべきことは誰人も拒むこと能はざるべし、又史に依りて世界各國の治亂盛衰の跡を緝き見るに一國の治亂は人倫の道の盛衰に關することの至て大なるを知るに足る、されば支那歴代の君王が率先して孔夫子の紹述し給ひし教を奉じ、又平和を愛する支那國民が一致したるが如くに其教を遵奉するに至

りしは無理ならぬごにして支那人の特徴たる頑固の性質は二千有余年の間一片の改良もなくして其教を維持したり、今日支那が世界の文明に後れて恰も二千年前の有様ごかはることなき所以は孔夫子の教を遵守するの結果なるべきか、之を以て泰西の學者は支那の文化を妨げたるものは孔夫子なり、ごて往々彼を非難するごを聞けば是れ孔夫子の罪にあらずして寧ろ支那人一般の罪なり、又彼は新しき理論を發明したることなく、世界文學の上にさしたる効績もなし、ごて孔夫子を泰西の古哲に劣る數等なりご評するものあれご是れ寧ろ評者其人の事情を洞察するの明なきをあらはす者ごいふべし、孔夫子は敢て泰西の哲學者の如くに原理の原理を研究せんごしたるにあらざり、ごして全く實踐躬行の道を本據ごしたるものなれば嶄新の理

論の出でざりしは宜なることなり、よしや孔子の教は哲學に
 裨補する所尠きにせよ彼が少年子弟の教育法を論じ人間の美
 徳を述べ給ふ點は恐く泰西の古哲も一步を譲る所なるべしこ
 信ず亦予が彼を大偉人と稱するは世界の學問に及ぼす効績の
 上より斷定したるにはあらずして彼が支那の政治の本尊とな
 り文學の元祖となり風俗の維持者となり所謂支那國民の思想
 行爲を左右せるの威力よりかくは唱へたるなり、要するに予は
 今日彼を世界に於ける大偉人と稱するを憚らざるなり、猛虎牙
 銳き昨今の天地たこへ支那帝國は浮世の夢となりはてんも孔
 夫子の教へは萬世不朽なるべし、

世界歴史譚 第二編 孔子終

明治三十二年二月十七日印刷
 明治三十二年二月二十日發行

定價金拾參錢

著者 吉國藤吉

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 金崎金平

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

印刷所 合資博進社工場

東京市小石川區久堅町百〇八番地



發兌元

東京日本橋區
 本町參丁目

博文館

著 君 樹 建 田 和 大

日本歷史譚

全部分四冊 (本判裝) 價正 (洋幣) 八冊 ● 金拾五元前 ● 金拾四元前 ● 金拾三元前 ● 金拾二元前 ● 金拾一元前 ● 金拾元前 ● 金拾元前 ● 金拾元前

編八拾
平田篤胤

國文學者として、別に一種の氣魄を蓄へ、平田篤胤は、こゝに大和田氏の流麗なる文を以て描出さる。篤胤の面目、正に其真を見るを得べし。

- 第一編 日 畝 三 聖 營 九 曾 惡 相 楠 大 日 塔
- 第二編 本 開
- 第三編 關 山 伐 子 公 官 弟 衛 郎 公 蓮 宮
- 第四編 豐 七 關 水 四 平 櫻 七 彰 城 平 威
- 第五編 太 本 太 戶 十 田 田 義 卿
- 第六編 閣 原 門 士 胤 外 落 隊 山 壤 衛

日本歷史譚 總目次

發 兌 元 東 京 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 博 文 館

少年讀本

巖谷小波君著 小嶋沖舟畫

井伊掃部頭 井伊掃部頭

井伊掃部頭は近世の偉人なり、開國の恩人なり、而かも往々世の誤解する所と成つて、賤徒となり、然れどもよく其冤を雪いで、餘蘊なく、近世の偉人、開國の恩人として、躍々紙面に再現せしむ、又是何等の快文字ぞ。

饗庭篁村翁著 下村觀山畫

曲亭馬琴

發 兌 元

東 京 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目

博 文 館

(11)

全部五拾冊 洋裝菊判紙數百三拾頁美本 正價(前) ● 一冊十三錢 ● 六冊七十錢 ● 十二冊一圓四錢 ● 廿四冊二圓五十錢 ● 郵稅一冊四錢

高嶋秋帆 水野方著

白河樂翁公 富岡永洗著

河井繼之助 梶田半古著

三條實美公 寺崎廣業著

山田長政 近日刊行

館

世界歷史譚

全廿四部 洋裝判入 每冊七錢 正價三金 拾金冊 ● 前二章三錢 全冊四錢 郵費另加

世界歷史譚は、歴史の各時代と各國民を代表するに足るべき偉人の豪傑の傳記也、著者は何れも著名の學者の文名を以て、士の事實を的確に記述するの的に當る言ふまでもない、文章亦簡明、雅馴な味を得べし、何人も興味を以て解し得べし。

文學士 高山林次郎君著 第一編 釋迦

文學士 吉國藤吉君著 第二編 孔子

文學士 上田敏君著 參編 耶蘇

文學士 大町芳衛君著 第四編 漢尼巴兒

文學士 笹川潔君著 第五編 比斯馬克

文學士 笹川潔君著

下山村書 觀本既成

横山觀書 二月發行

小阪書堂 三月發行

四月發行

五月發行

發兌元 東京日本橋區 博文館